

サイコアナリティカル

英 文 学 論 叢

—英語・英米文学の精神分析学的研究—

第 45 号

林曉雄先生 追悼号

The Journal of Psychoanalytical Study
of English Language and Literature

No. 45

サイコアナリティカル英文学会

The Society for Psychoanalytical Study
of English Language and Literature

目 次

1. 林曉雄先生のご逝去を悼む	1
会長 小園 敏幸	
2. 林曉雄先生の思い出	9
元 副会長 木村 保司	
(学術論文：アメリカ文学)	
3. 不気味な永劫回帰と輪廻転生 —— Melville の <i>Moby-Dick</i> ——	13
佐々木英哲	
【SYNOPSIS】 <i>Uncanny Reincarnation and Eternal Return in Melville's Moby-Dick</i>	49
Eitetsu Sasaki	
4. <i>The Wild Palms – If I Forgot Thee, Jerusalem</i> – における 2つの物語の関係性	51
有働 牧子	
【SYNOPSIS】 <i>The Connection of the Two Stories in The Wild Palms [If I Forgot Thee, Jerusalem]</i>	64
Makiko Udo	
5. 執筆者紹介	65
6. サイコアナリティカル英文学会役員	66
7. サイコアナリティカル英文学会会則	67
8. 『サイコアナリティカル英文学論叢』 投稿規程	71
9. サイコアナリティカル英文学会の図書出版に関する規程	74
10. 編集後記	75
小園 敏幸	

林暁雄先生のご逝去を悼む

会長 小園 敏 幸

サイコアナリティカル英文学会にとって非常に悲しい出来事が起きました。2024（令和6）年9月9日、林暁雄先生のご長女の佐藤美沢様からお電話をいただき、先生が9月7日夜8時～8時半の間に亡くなられた、とのご報告を受けました。死因は「食べたものを吐いての窒息死」あるいは「心不全」とのことでした。享年88です。

林暁雄先生と私との繋がりは、周囲からは想像も出来ないほどの強い絆で結ばれていたと確信しております。それだけに、林先生のご逝去を即座には受け入れ難く、時に、深夜に一人で書斎にいと、「林先生をあの世から連れ戻したい」と思うこと頻りです。無論、林先生には、もう二度とお会いすることが出来ないにも拘らず、私の内的な幻想の世界では、今までと同様に林先生に対する思慕の情が続いているのです。これは、所謂 object loss（対象喪失）であり、精神分析的に言えば、Sigmund Freud の mourning work（悲哀の仕事）ということになるかと思えます。

実は、林先生が亡くなられる13日前の8月25日（日）に、先生が入所されている三重県員弁郡東員町の施設まで美沢様に案内をしていただき、ロビーで1時間半程、林先生・美沢様そして小園の3人で楽しくお茶をいただきました。先生は何もお話しになりませんでした。時々目元が微笑んでおられました。そして、私が施設を後にする際、先生と握手を交わしましたが、その握力の強さには驚かされました。私が「先生は握力が強いですね。こんなに強かったら長生きしますよ。また、お会いしましょう。」と言いましたら、先生は更に強く握り返してきました。

先生とお会いしたその翌日（8月26日）が本学会の常任理事会で名古

屋の金城学院大学での開催でしたので、常任理事の先生方には林先生の現状をお知らせいたしました。

しかし、その後これほど早く先生のご逝去の報を受けるとは思ってもみませんでした。只々残念でなりません。

ここで少し、林暁雄先生とサイコアナリティカル英文学会との結び付きや思い出を振り返ってみたいと思います。

林先生は、現在の「北九州市立大学」外国語学部米英学科のご卒業で、私の数年先輩に当たります。先生が入学・卒業された当時は「小倉市立北九州大学」でした。私も同じく、小倉市立北九州大学に入学しましたが、卒業年度が折しも1963（昭和38）年の小倉・八幡・戸畑・門司・若松の五市が対等合併し、北九州市になったために、大学の名称も「北九州市立北九州大学」と改名されて、その第1回卒業生となりました。但し、大学の名称こそ変わりましたが、林先生と私は共通の恩師である今田準造先生の教えを受けた先輩後輩の関係にあります。こうしたご縁で、私を林先生にご紹介下さったのも今田準造先生でした。

今田準造先生は、1964年度を以て北九州市立北九州大学を退職されて、名誉教授になられ、1965（昭和40）年4月から名古屋学院大学に勤務されることになりました。その3年後の1968（昭和43）年に林先生が名古屋学院大学専任講師になられたので、恐らくその頃、名古屋学院大学の今田先生の研究室で林先生に初めてお会いしたと記憶しております。

その後、林先生とは親しくお茶を飲んだり、大学の所在地である瀬戸（愛知県瀬戸市）で食事をしたりしました。当時、私は金城学院大学に程近い、緑豊かな翠松園（名古屋市守山区）に住んでいたこともあり、ご家族お揃いで遊びに来られたこともありました。

また、私たちはサイコアナリティカル英文学会の設立に向けて、名古屋学院大学の今田先生や佐久間保治先生の研究室での会合に参加したり、時には、今田先生、林先生、新熊清先生、そして私の4人で名古屋の地下街で、

握り鮓と少しのお酒をいただきながら、学会の青写真を描いたりしたこともありました。

その後、1974（昭和 49）年に遂に、学会が設立され、同年 7 月 20 日（土）には、灼熱の太陽が照りつける程の晴天下、神戸市生田区のパルモア学院にて、発起人会兼第 1 回理事会が開催されました。また、同年 12 月 1 日（日）に神戸市東灘区の甲南学園同窓会館（平生記念館）にて開催された第 2 回理事会では、以下のとおり、本学会の役員が承認されました（氏名は五十音順、敬称略）。

名誉会長：大槻憲二

会長： 今田準造

副会長： 佐久間保治・三戸雄一

理事： 今田準造・池本喬・荻野目博道・加藤宗幸・金田正也（会計監査）・佐久間保治・清水悦男（幹事）・土居琢磨・伏見繁一（会計 監査）・本多三七・三戸雄一・元田脩一・山本昂

運営委員：小園敏幸（理事会・大会記録）・新熊清（機関誌発行・大会準備）・清水克正（大会準備）・林暁雄（学会事務・大会準備）・藤木隆寛（大会準備）

このように、第 2 回理事会において、林先生は 1974（昭和 49）年 7 月 20 日から 1982（昭和 57）年 3 月 31 日まで事務局を担当されることになりました。事務局ご担当の期間に開催された大会には、毎回、必ず奥様の広子様も受付のお手伝いのためにご参加下さっていました。

その本学会における功績と業績を思う際、先ず以て、林先生は本学会の発起人のお一人であり、学会設立の草創期においては誰よりも熱心に、積極的に、学会発展のために惜しめない言動をされていたことが、まるで昨

日の出来事のように思い出されます。

次に、サイコアナリティカル英文学会創立 50 周年の歴史の中で、林先生が本学会とどのように関わって来られたのかを、役職ごとに今一度、お示ししたいと思います。

「事務局」として：

1974（昭和 49）年 7 月 20 日から 1982（昭和 57）年 3 月 31 日まで。尚、林先生が Iowa State University に Visiting Scholar として留学された期間（1980〈昭和 55〉年 5 月～1981〈昭和 56〉年 3 月）は、小園が事務局を代行（1980（昭和 55）年 2 月 1 日～1981（昭和 56）年 3 月 31 日）。

「運営委員」として：

1974（昭和 49）年 7 月 20 日～2005（平成 17）年 3 月 31 日。約 31 年間。

「編集委員兼査読委員」として：

本学会誌の『論叢』の創刊号から第 22 号まで。

尚、林先生が編集委員兼査読委員であった創刊号から第 22 号までの委員のメンバーは以下の通り（五十音順）。

『論叢』創刊号～第 8 号：小園敏幸、新熊清、林曉雄。

第 9 号：今田準造、小園敏幸、林曉雄。

第 10 号：今田準造、小園敏幸、林曉雄、山下光昭、吉津成久。

第 11 号：小園敏幸、林曉雄、山下光昭、吉津成久。

第 12 号～第 15 号：小園敏幸、林曉雄、吉津成久。

第 16 号～第 22 号：倉橋淑子、小園敏幸、林曉雄、吉津成久。

「理事」として：

1984(昭和 59)年 4 月 1 日～2014(平成 26)年 3 月 31 日。30 年間。

「常任理事」として：

1987(昭和 62)年 4 月 1 日～2014(平成 26)年 3 月 31 日。27 年間。

「副会長」として：

2002(平成 14)年 4 月 1 日～2014(平成 26)年 3 月 31 日。12 年間。
尚、会則第 11 条では、副会長を 2 名置くことになっているが、第 4 代・島村馨会長(2002〈平成 14〉年 4 月 1 日～2005〔平成 17〕年 3 月 31 日)の時には、林暁雄先生のみ副会長。副会長 1 名は欠員である。

2005〔平成 17〕年 4 月 1 日から第 5 代・小園敏幸会長に代わったが 2008(平成 20)年 3 月 31 日まで、林暁雄先生のみ副会長。

小園会長の 2 期目の 2008(平成 20)年 4 月 1 日から副会長として倉橋淑子先生を補充し、その後は、会則 11 条に則り、林暁雄先生と倉橋淑子先生の副会長 2 名体制をとる。

2008(平成 20)年 12 月 25 日付で本学会は、「日本学術会議協力学術研究団体」として認定・指定される。そして、2009 年の『英米文学の精神分析的考察』(本学会創立 35 周年記念論文集)の発刊を林暁雄副会長・倉橋淑子副会長・山本昂顧問・そして会長としての私は、共に感慨深く喜ぶことができました。

「顧問」として：

2014(平成 26)年 4 月 1 日～2023(令和 5)年 3 月 31 日。9 年間。

その林先生が他界されましたことは、只々残念でなりません。現在では海を越えてその存在を認知されるに至った本学会の発展が、会員各位のご努力・ご協力・ご支援の賜物であることは当然ですが、本学会設立の発起人のお一人であられた林先生の学会発展への強い信念と情熱もまた、学会の今日までの歩みを思う際、忘れることが出来ないものです。

我々会員一同、在りし日の林先生を偲び、寂しさや悲しみに耐え、この学会を盛り上げていくことを改めて心に誓う次第です。

本学会が、今後、益々発展し、世に貢献出来ますよう願いつつ、此処に謹んで林暁雄先生のご逝去を悼み、ご冥福をお祈り申し上げます。



顧問 故 林 曉雄 先生

林 暁雄先生 略歴

1936 (昭11) 年1月4日生	
1958 (昭33) 年3月	北九州大学外国語学部米英科卒業
同 4月	上繁船舶株式会社入社外国船係英語通訳
同 9月	常盤高校英語科講師
1960 (昭35) 年1月	株式会社野沢組神戸支店 (貿易商社) 入社
1968 (昭43) 年4月	名古屋学院大学講師
1972 (昭47) 年4月	同大学助教授昇任
1980 (昭55) 年5月 ∪ 1981 (昭56) 年3月	アイオワ州立大学客員教授として赴任
1998 (平10) 年4月	名古屋学院大学教授昇任
2006 (平18) 年3月	同大学定年退職
同 4月	同大学名誉教授称号授与

林 暁雄先生 業績

著書		
1970 (昭45) 年4月	外国貿易実務・英文通信	晃洋書房
同 4月	大学英作文と基本 (佐久間保治氏共編)	大盛堂書房
1973 (昭48) 年4月	大学英作文総合演習 (佐久間保治氏共編)	晃洋書房
同 5月	現代貿易英文通信要義	晃洋書房
1986 (昭61) 年3月	現代ビジネス英和辞典 (三戸雄氏・佐久間保治氏共編)	開拓社
論文		
1970 (昭45) 年12月	近代貿易英文通信論	名古屋学院大学論集第7巻第2号

林暁雄先生の思い出

元 副会長 木 村 保 司

日頃のサイコアナリティカル英文学会活動は別にして林暁雄先生とお会いした心に残る思い出は三度ほどある。私にとってはいつまでも記憶に残る大切なものであり、私の針路を導き支えてくださった貴重な体験でもあります。

初めて林先生をお見かけしたのは昭和 51 年（1976 年）3 月の本学会第 2 回大会の時神戸の舞子ビラ 102 号会議室であった。その時、私は大学の 4 年で卒業式（当然欠席しましたが）を間じかに控えていた頃でした。三戸雄一先生がゼミの担当で「精神分析の学会があるので出てみる」と授業中によく仰っておられたのを記憶していたからである。就職先もまったく決まっていなかったので閑をもて余していた私は神戸まで出かけることにしました。学会発表を真摯に聞きに行くという学究心より「精神分析」という何やら怪しい文言に魅かれて行ったのですが、その会議室におられたのが今思えば林暁雄先生・小園敏幸先生・初代会長の今田準造先生でした。林先生は何やら会の当日の説明などをしておられ、小園先生はその脇で気鋭の学者然として立っておられたのをおぼろげに覚えています。私は最後まで発表を拝聴したわけではなく、早々に引き揚げて舞子周辺をぶらり観光しました。というのも当時から不真面目な学生であった私は発表の内容が全く理解できていなかったからです。

二度目にお会いしたのがその二年後の事。林先生・佐久間保治先生・三戸雄一先生たちが大作「現代ビジネス英和辞典」（開拓社）を制作していた板宿（神戸）での合宿でした。私たち学生は畳一面に敷かれた単語カードを ABC 順に並べたりミススペルがないか、和訳に誤字がないかを点検

したりする作業でした。林先生が指揮を執り、佐久間先生と学生たちが冗談を交わしながらのてんやわんやの現場でした。林先生の会話の引出は多様で皆が笑わされ、また佐久間先生との親子のような話のやり取りにサークル全体が和んで行きました。その頃だったと思いますが、針路を決めていない私に対し「将来どうするんだ」と林先生は尋ねて下さいました。リクルート活動ゼロの私は一瞬「うっ」となりましたが、数日後、先生が非常勤で講義されている大学の『英作文』の授業に招待して下さいました。学生たちに大声で質問を促しながら、様々なタイプの表現の仕方を教授するという誠に明快な授業でした。その日の午後、林ファミリーとご一緒に三宮で食事をご馳走になりました。その場でも北九州の商社時代に同僚であった奥様へのプロポーズ話（奥様は終始赤面されていましたが）や勤務校（名古屋学院大学）の採用面接試験での学長との丁々発止な痛快極まる面接の様子等々お話しは止むことはありませんでした。それもこれも将来不安定であった私への励ましであり、先の就職先を示唆して頂いたのかなと思うばかりの内容でした。このような事がご縁となり、先生は『サイコアナリティカル英文学論叢』（3号）に論文を掲載するように勧めてくださいました。これが初めての投稿論文となりましたが、私にとっては大学教員を目指す絶好の意思決定の機会となりました。

三度目の思い出は、八年前の暑さもまだ残る9月初めの訪問でした。東員町（三重）のご自宅を訪問したのはこれが初めてでしたが、先生は相変わらずタバコをふかしながら「よう久しぶり」と言って歓迎してくださいました。先生のスモーカー振りは年季が入っておられ、止めると病気になると言って豪快に笑っておられました。まあ私もスモーカーなので学会などの休憩時間には席を離れ、喫煙所に二人で籠っては煙を楽しんでいました。懐かしいです。

先生はその頃すでにご退職され悠々自適なご様子でしたが、九州男児ぶりは少しも変わっていませんでした。奥様を交え昔話に花が咲きましたが、

かつてのプロポーズ作戦に話が及ぶとチャーミングな奥様は微笑みながら小さく相槌を打っておられました。お二人の愛情がほとぼしる瞬間でした。その奥様は2020年1月にご逝去されましたが、サイコアナリティカル英文学会の事務を長年にわたり先生と共に支えてくださった裏方の功労者でもあります。

私たちはその日ご自宅の裏手にある大きなため池の遊歩道をゆっくりと散歩しました。他愛ない話題に大笑いしながら歩きました。蝉の音がやたらに響く夕刻でしたが、それに劣らぬ大きな声だったと思います。お陰様で充実感あふれる一日を過ごすことができました。

林先生と奥様には感謝の思いしかございません。個人的にもまた当学会の事務局長・副会長としても長年にわたり支えて下さり心より御礼申し上げます。どうか天国で奥様とともに安らかにお過ごしください。

先生のご冥福を心からお祈りいたします。

.....

追記:

木村保司先生のプロフィールは次の通りです。

園田学園女子大学名誉教授・元 人間教育学部児童教育学科英語主任。
また学内の国際交流センター担当部長時代は、クイーンズランド工科大学（オーストラリア）、クライストチャーチ教育大学（ニュージーランド）、南京大学（中国）などとの教員・学生の交流などに従事し、生涯学習教育センター長時代は特に熊野市（三重）との地域連携交流などに力点を置いて活動してきました。

サイコアナリティカル英文学会では、2014（平成26）年4月1日～2020（平成32）年3月31日まで、副会長・常任理事・理事の重任を果たされました。

不気味な永劫回帰と輪廻転生

—— Melville の *Moby-Dick* ——

佐々木 英哲

緒言

ハーマン・メルヴィル (Herman Melville, 1819-91) の、今日では代表作とされる海洋冒険小説シリーズの最終作『白鯨』 (*Moby-Dick; or, The Whale*, 1851)¹ に対する当時の評価としては、作家にとって意にそぐわないものが多かった。その最たる一例を 1851 年 11 月の『ボストン・ポスト』 (*The Boston Post*) に求めると、「わざわざ金を払ってまで『白鯨』を読むには及ばない (“The Whale” is not worth the money asked for it)」² などと酷評されている。俗受けすることが必要となった 19 世紀アメリカの文学市場で、『白鯨』は受けが悪かったのだ。なにせ作品中のアンチ・ヒーローであるエイハブ船長 (Captain Ahab) は神を蔑するような言動を繰り返し、虚勢に過ぎないにしても、「俺に向かって洩神だなんて言うな。もし俺を侮辱するなら、太陽だって打ちのめしてやる (Talk not to me of blasphemy, man; I'd strike the sun if it insulted me (p. 164))」、などと、第二次大覚醒と呼ばれる信仰復活運動がピークに達する 19 世紀中葉にあっては、ご法度となる言葉を放っている。開き直ったエイハブは自らを狂人と呼んで憚らず、「皆は俺を気違いだと考える—— [右腕の一等航海士] スターバック (Starbuck) もね。だが、俺は悪魔的で、気違いに輪を掛けた気違いだ。この激しい気の狂いようだけが、己を理解する冷静さだ (They think me mad—Starbuck does; but I'm demoniac, I am madness maddened! That wild madness that's only calm to comprehend itself! (p.

168))」と、相手を煙に巻いてみせる始末である。当然のことながら、それまで海洋冒険小説家として時代の寵児だったメルヴィルの評判は、一転して急下降に転じてしまう。³ そもそも（偽）神とも思しき存在との激闘という深遠なテーマを、半ば冗談めかしたバーレスク的な口調で語ることに加え、その語り手イシュマエル (Ishmael) はラブレール (François Rabelais, 1483-1594) ばりに百科事典的かつ網羅的で徹底的な博識振りと饒舌振りを披露するものだから、読み手に混乱と過剰感と食傷感をもたらしてしまっている。⁴ 当時としてはあまりに前衛的アヴァンギャルドで規格外のスタイルであったのである。

だが、人々に受け入れられなかった理由は、むしろ別の所にありはしないか。精神分析学者のラカン (Jacques-Marie-Émile Lacan, 1901-81) が言うような、⁵ 言語でもイメージでも完全に把握することが困難な「現実界」の真相——あたかもプロメテウス (Prometheus) さながら神に反旗を翻し、悪魔に寄り添うような「不気味さ」を、本作が敢えて言表しようとしているためではなかろうか。本作が人間 (の代表プロメテウスとしてのエイハブ) に於ける精神のリアル実相を、白鯨を媒介したうえで、アレゴライズ言表化した所産であったからではなかろうか。「モビー・ディック (白鯨 /Moby Dick) はあらゆる場所に遍在するだけでなく、不死身でもある (というのも不死身とは、いつでも存在することに他ならないのだから) (Moby Dick not only ubiquitous, but immortal (for immortality is but ubiquity in time (p. 183)))」と評されるモビー・ディックは、権能という点で、ほぼ神に比肩する。このような「不気味な」白鯨を、神をも挑発する狂気を孕んだエイハブが追撃するさまも「不気味」である。なお、フロイトに言わせると、不気味さとは抑圧していたもの、エディプス・コンプレックスが回帰する現象に伴う感覚⁶ である以上、不気味さと対峙することは、エディプス・コンプレックス(をもたらず環境)と対峙することにならないか。

このようなエイハブの不気味な流神的世界——を、こう言ってよければ

暴力がものを言う恐怖に満ち満ちた不気味な男性中心主義的父権世界を、語り手イシュマエルが受け入れることはなかった。ちなみにイシュマエルとは旧約聖書の「創世記」に言及があり、長年、世継ぎを授からなかった家父長アブラハム (Abraham) の婚外子だとされ、その後、不産女だと思われていたアブラハムの妻サラ (Sarah) がイサク (Isaac) を産んだため、イシュマエルとその母親で奴隷女のハガル (Hagar) は、砂漠に追放されてしまうことになっている。いみじくも『白鯨』のイシュマエルを救出したのが、「捕鯨本来の航路を外した捕鯨船レイチエル号 (the devious-cruising Rachel (p. 573))」であったことを思い起こしたい。この船名は旧約聖書「エレミヤ書」第 31 章に言及のあるラケルに由来し、ラケルは子供が殺されて嘆くユダヤ人の母親の悲しみを代弁するとされる。その〈ラケル / 捕鯨船レイチエル号〉が、「行方不明となった子供達を探す中で、もう一人の孤児 [イシュマエル] を見つけ出し (in her retracing search after her missing children, only found another orphan (p. 573))」、イシュマエルは生き延びる。このような〈不気味さ / エディプス問題〉に対峙するエイハブと語り手イシュマエルの姿勢は、前者では不気味な自滅的な欲動であるタナトスに至り、後者ではカタルシス感をもたらすエロスに帰着するという、決定的な差をもたらしている。

作家も青年時代に捕鯨船に乗り込んだのは、周知の事実である。捕鯨船は厳格な父権的階層社会であったから、イシュマエルもメルヴィルもともに階層社会で末端労働に甘んじざるを得なかった。そこで本稿の執筆目的としては、作家としてメルヴィル自身はイシュマエルの語りを通して、「不気味な〈エイハブ / モビー・ディック〉」にどのようなスタンスで対峙したか、を検証することとしたい。

以下の行論の流れとしては、まず〈非 / 超〉日常的な存在、〈不気味さ / 恐怖 / 偉大さ〉を感じさせる圧倒的な存在としての〈モビー・ディック / エイハブ〉を前にして、〈エイハブ / イシュマエル / メルヴィル〉が発動す

る精神機制を作品から読み解いていく。精神分析、ポスト構造主義的な視座からこの作業に取り組む。横暴な父権の男性でありかつ幼児的側面も残し、(白)鯨を敵視しつつ同一化を図るという矛盾した精神機制をエイハブが備えていることを、不気味な〈反復/分身〉現象に注目するエディプス理論から説明できないか考察する。そのうえでエイハブの観察者としてのイシュマエルが、エイハブの^{アンドロセントリック}男性中心主義的な女性嫌悪症ではなく、生を営むうえでの^{ガイノセントリック}女性原理をスタンスとして採用していることを示す。そのイシュマエルを理想的ポジションとして仰ぎ見つつも、両性具有的な美を纏う巨匠ホーソーンを白鯨の位置に据えたうえで——文学的巨匠：海の王者——、ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804-64) との同性愛的同一化を目指すスタンスをメルヴィルはとった。そのため作家本人とその精神的反映である作品は、不気味な両価性を強めてしまう結果を招いた、との結論を提示する予定である。

1. 精神分析学の視座

80年代以降の今日まで続くメルヴィル批評の趨勢としては、作品を史的にコンテクスチュアライズしたうえで、アメリカの覇権的帝国主義イデオロギー、そのイデオロギーを支える非人道的資本主義ならびに人種主義、つまりアメリカニズムに対するメルヴィルの批判的意識を実証的に透かし彫りにしていこうとするニュー・ヒストリシズムが、批評の主流となっている感がある。⁷ もっとも、ニュー・ヒストリシズムにありがちなきらいなのだが、実証的事実との照合可能性を過度に重視するあまり、場合によっては作品のアレゴリー性をなおざりにしてしまう過誤を犯すこともありえる。アレゴリー (allegory) とは語源的にはギリシャ語の *allos* = *other* (他の) と *agoreuein* = *speak* (*agoreuein* 話す) からの合成語であり、指示対象以外の対象を同時に示すポテンシャルを秘めたものだ。『白鯨』を精神

分析学にひきつけて言うならば、鯨が実際の鯨を言及するのではない場合もあり得る。ラカンの継承者であるミレール (Jacques-Alain Miller) を解説するフルリー (Nicolas Floury) によれば、「精神分析では、言表と事実が一致する必要はまったくない。精神分析に経験という概念が含まれるとしても、それは〔解釈〕によって言語それ自体の内部で生産される心理の効果に関わるものとしての経験のことであり、けっして実際の現実のなかの経験ではない」⁸ からだ。

そこで本稿の作業は、作品内で能記 (記号表現 signifiant) が書記 (記号内容 signifié) として言及した対象を額面通りに受け取るのではなく、記号 (言語) が無意識と連動していることを想定する。この想定は、議論を先取りして言えば、本作で能記として挙げられるのがモビー・ディック (をはじめとする鯨類) であり、書記としてはそれがモビー・ディック (をはじめとする鯨類) 以外の対象、つまりエイハブの無意識を言表する、というものである。この前提のうえで、エイハブの無意識に潜む衝動、欲動を議論の俎上にあげることとする。

2. 「不気味さ」の淵源

本作の鍵は、序論で述べたように「不気味さ」の解説にある。不気味さが喚起されるのは、「自分とは何者か」を認識し確立するプロセスであるアイデンティティ (自己同一性) が、その確立が脅かされるときであろう。そもそも人は自らの公的なアイデンティティを打ち出すため、背理法的な $A = \text{not-}B$ なる等式を用いる。ここで B は他性、自己にとって異質なものの、 A は自己の本質を意味する。しかしこれが (政治的) 無意識の領域ではダイアロジカルに構成される存在として、アイデンティティは $A = A/B$ として撞着語法的に表記される。以上はスタリブラス (Peter Stallybrass) とホホワイト (Allon White) が、「逸脱」現象を解明しようとしたときに用い

た代数学である。⁹ $A=A/B$ が可視化すると、A は怪物的で不気味な存在と感じられるという。これと完全符合とはならないが、ラカンの S (A) と表記することもできるだろう。S は主体、A は他者である。S (A) は、他者 A の場において主体 S は欲望を構築することを示す。だから人は自らの内に〈他性/親密なる他/外密/Extimité〉を本質的なものとして抱え込んでいる存在だ (the ego as the product of the internalization of otherness)、¹⁰ とラカンは理解する。ポスト構造主義哲学の流れを汲むジャン＝リュック・ナンシー (Jean-Luc Nancy, 1940-2021) も、「他性とはそのつど各々の『私自身』の他性であり、その『私自身』は他者としてのみ『私自身』であるという。¹¹ また先に言及したフロイト的観点からは、内なる他性 (他者) は、親しみ深いもの (Heimlich、家庭的、安心感のあるもの) であるにもかかわらず、異質性を帯びているため、抑圧され、その抑圧作用が不安と不気味さを惹起してしまう、とされる。つまり、内なる他性はなによりも父親的属性が喚起するエディプス・コンプレックスと結びつきやすい、という意味である。以下、精神分析学、ポスト構造主義が打ち出す上記の定式を踏まえたうえで、作品が醸し出す「不気味さ」と読者との関係性を考察する。

物語後半で本来の語り手イシュマエルが後退した後、メルヴィルはエイハブの嘆きを代弁してみせる。そのなかでエイハブがメルヴィル (イシュマエル) を通して語るのは、「我々は定まった段階を通して前進する (成熟していく) のではなく (we do not advance through fixed gradations (p. 492))」、「何度も幼児や少年に立ち返り、何度も成人になる ([we] are infants, boys, and men (p. 492))」のであり、しかもその幼児から成人に至るサイクルの最後には、「もし [状況が違っていたら] という仮定に何度も永遠に [見舞われる] (If eternally (p. 492)) (強調筆者)」、というものである。このペシミズムに満ちたエイハブのやるせなさは、どこに起因するのか。経験値の高さが知性を裏打ちすることはあっても、年を重

ねることで得られるはずの智性をなんら保証するものではない事実、つまり身体的には老人でありかつ内面的には幼児であるかもしれない、という忸怩たる思いに駆られるものの、その原因がわからない苛立ちに起因するのではなからうか。だからエイハブは自暴自棄になって神を呪ってみせるのだ——「白髪だらけの髪は灰からしか生え出ないものよ。神よ、神よ、神よ。俺の心臓を引き裂いてくれないか。俺の脳みそをぶっ潰してくれないか……愚弄、愚弄、ひどく [俺を] 馬鹿にしやがる白髪頭。そんな白髪を抱くほど、十分に人生を俺は堪能したのか。そんなふうにとんでもない老いばれに俺は見えるのか？ また俺はそう感じているのか。(Locks so grey did never grow but from out some ashes! . . . God! God! God!--crack my heart!--stave my brain! —mockery! mockery! bitter, biting mockery of grey hairs, have I lived enough joy to wear ye; and seem and feel thus intolerably old? (p. 144))」、と。積み上げてきた営為(白鯨追撃)が徒労に過ぎなかったことが判明した時、残された時間に限りのあることを意識する初老のエイハブがとるリアクションとしては、もはや焦りと怒りしかないだろう。神を呪い、勢いに任せて自己破滅的な死の欲動に身を投じ、乳幼児から少年、少年から青年、青年から成人へと繰り返し反復するだけの永劫回帰という呪縛である。成長が永遠に許されない不気味なサイクルを断ち切ってしまいたい、とするエイハブのマゾヒズムとサディズムをここに確認できましょう。そして我々読み手も、おそらくはメルヴィルも、エイハブのようにだけはなりたくないと願いつつも、作品が放つサブリミナル効果により、自分にも少なからずエイハブ的な所があるのでは、と疑心暗鬼に陥ってしまう。だから老人 (A) でありかつ同時に幼児 (B) である不気味な (A=A/B) エイハブに——こう言ってよければ、本来モノロジカル (A) であるはずなのに、ダイアロジカル (A/B) で、ドッペルゲンガー的なエイハブのアイデンティティに——対峙して、エイハブも読み手も不安に打ちのめされる。エイハブ的不気味さを、我々読み

手も、そしておそらく作家自身も分有するからだ。ラカン流に言えば、読み手達もエイハブに自らの鏡像を見るのだ。そしてフロイト流に言えば、我々 (A) にとってエイハブが我々自身の内部存在的ポテンシャル (B) だという点で我々に近いゆえに、つまり $A=A/B$ であるがゆえに、エイハブは我々にとって不気味なのだ。ただしイシュマエルと読者はエイハブの存在の不気味性を認識しても、エイハブ本人は自覚できているかは定かではない。なぜならこれらの現象はエイハブにとって半ば無意識的、半ば意識的な形でしか現出しないからだ。次節ではエイハブ的不気味さ——大人でありかつ小児である——が、エイハブが〈抱える/抑圧する〉、事実上、放置したままのエディプス問題に由来することを論じる。「父方祖先の秘密は墓にあるのだから、墓に足を運び、その秘密を探らねばならない (the secret of their paternity lies in their grave, and we must there to learn it (p. 492))」と、メルヴィル自身が持論を展開していることから示唆されるように、我々としても〈エディプス/父親〉関連事象を解明していくことになる。なお、典型的なエディプス関連事象と言えば、フロイトが言うところの「不気味なもの」であり、いみじくもメルヴィルは「... 生命という理解しがたい幻、それがすべての [謎の] 鍵だ (... the image of the ungraspable phantom of life; and this is the key to it all (p. 5))」と単刀直入に核心を突いた発言を残している。

3. エイハブのエディプス問題

3. A. 分身現象と反ファミリー・ロマンス

本稿では作品分析の足掛かりをエイハブとモビー・ディックの不気味さに求めている。前節に引き続き本節でも、真逆の敵対同士にあるにもかかわらず、エイハブが白鯨的な異質性を内包した不気味なアイデンティティを帯び、その背景にはエディプス・コンプレックスが潜んでいる可能性を

探っていく。

ユング的な観点を導入すれば、事象認識は集合的無意識の磁場の影響を受けるものと理解される。欧米の文化圏で集合的無意識に計り知れないほどの影響力を与えているのが聖書である。ユダヤ・キリスト教では『イザヤ書』27章1節に、「その日、主は堅く大いなる強い剣で逃げる蛇、レビヤタン、曲りくねる蛇、レビヤタンを罰し、また海における龍を殺される」とあるように、リヴァイアサンは神によって滅ぼされるべき悪の象徴と捉えられている。悪の象徴だからこそ、ヨブ記41章19-21節では、「その口からは、たいまつが燃えいで、/火花をいだす。その鼻の穴からは煙が出てきて、/さながら煮え立つなべの水煙のごとく、/燃える葦の煙のようだ。その息は炭火をおこし、/その口からは炎が出る」と、描かれる。リヴァイアサンは聖書で鯨だと明言されているわけではないものの、龍や海の怪物だと推察される。なんとならば先述のヨブ記に加え、各種文献を渉猟する作者は巻頭にて (p. xx)、ミルトン (John Milton, 1608-74) の『失樂園』 (*Paradise Lost*, 1667) の一節——「あの海の野獣 / リヴァイアサン、あらゆる神の被造物なかで / 最大のもの に作り上げた (That sea beast / Leviathan, which God of all his works / Created hugest (bk.1: ll.200-203))」——に言及し、海に生息する「最大」の野獣をリヴァイアサンに同定するからだ (海の野獣 sea beast = 怪物 M (onster) = リヴァイアサン L (eviathan))。さらに18世紀から19世紀にかけて捕鯨業がアメリカで盛んになることに伴い、「手負いの^{モンスター}怪物が見せる極度の凶暴性、抜け目のなさ、悪意は、決して稀ではなく、そういった事例は多数に及ぶが、そういった事例のおかげで、その頃には抹香鯨漁は異彩を放つようになった (Yet as of late the Sperm Whale fishery had been marked by various and not unfrequent instances of great ferocity, cunning, and malice in the monster attacked. (p.180))」。こうして捕鯨業の存在が前景化するとともに、捕鯨従事者を悩ます凶暴な怪物と鯨が同一視され (M=

鯨 W (hale))、先の『失樂園』に於いて判明したように海の怪物 (野獣) がリヴァイアサン (M=L) なのだから、三段論法により怪物 / リヴァイアサン / 鯨が等号で結ばれ (M=L=W)、鯨はリヴァイアサンと同一化する (W=L)。

実際には欧米の資本主義発展のために鯨が捕獲されるのだが、神によって滅ぼされるべきリヴァイアサン(鯨)を、神に代わって代理執行している、とエイハブは自身の行動を正当化しているに過ぎない。神が創造した世界に悪が存在するのは、その悪を罰することで神の義を弁証することに他ならない、と説く神義論 (Theodicy) を参照枠として作品解釈を試みるジョナサン・クック (Jonathan A. Cook)¹² も指摘していることであるが、誇大妄想狂のエイハブが神の行為を自分が代行すると誤認しているならば、いや神そのものとして振舞うならば、彼は神格化を目論んでいることになる。

実際、エイハブを神と同一視するには読み手として抵抗を覚える。捕鯨船のなかでは乗組員達はエイハブ船長に絶対服従であるため、エイハブは王者としての風格もカリスマ性も備えてはいるものの、神的存在とは言い難い。何故だろう。エイハブがもつ神のような、あるいは王者のようなアイデンティティも、実は表面的な装いに過ぎないのでは、という疑義の念を拭い切れないからである。

ピークオド号 (Pequod) のメインマストに打ち付けられていた金貨に刻印された意匠を凝視しながら、エイハブ船長が乗組員たちの前で熱弁をふるう場面がある。[[アンデス山脈の] 三つの峰、は反逆^{ルシファー}天使みたいに誇り高い。がっしりした塔、それはエイハブだ。あの火山もエイハブだ。勇敢で恐れ知らずの勝ち誇った鳥、それもエイハブだ。すべてがエイハブだ ([T]hree peaks as proud as Lucifer. The firm tower, that is Ahab; the volcano, that is Ahab; the courageous, the undaunted, and victorious fowl, that, too, is Ahab; all are Ahab (p. 431))、と息巻くエイハブは、

神に抗う自らの唯我独尊的な本性を正当化する。そのエイハブが度を越えた野望を持つことは、エイハブを雇うピーレグ (Peleg) 老人の証言——「どえらい、神とは違うが、神みたいな男だ (a grand, ungodly, god-like man (p. 79))」——からも明白だ。そもそもエイハブが船長を務める船の名 Pequod (ピークオド) 号は、新大陸入植者に激しい抵抗を示したアメリカ先住民 Pequot (ピクオート) 族に由来するから、エイハブが神に反抗する者であることは、当初から運命づけられているようなものである。作品中に旧約聖書『ヨナ書』の中心人物ヨナ (Jonah) への言及が、捕鯨漁師達を相手に説教するマッフル神父 (Father Mapple) によってなされていることも、神への反逆者であるエイハブを待ち構える悲劇的運命の伏線となっている。ちなみにヨナは墮落したニネベの人々に警告を与えるよう神から命を受けたものの、悪徳が蔓延る町に赴くことに怖気づき、神の命を実行に移さなかったため、(鯨と思しき) 大魚に飲み込まれてしまう罰を受けることになっている。

ピークオド号のような限域的な空間にはエイハブを律する法と社会は存在しない。部下であるスターバッカー等航海士がエイハブ船長に対し、白鯨だけを追い求めるあまり、利益追求という資本主義の根本原則を見失うようなことがあってはならない、と進言するも、エイハブは耳を貸さない。ラカン精神分析学の視座からすれば、このように理解されないか。つまり、エイハブのような唯我独尊的な男性の内界にあっては、法と言語の範域たる象徴界は存在せず、自分の欲求が母親あるいは自分に服従する部下達によって、即時かつ無条件に叶えてもらえるような想像界にエイハブは留まっている、と。白鯨への私的な復讐欲を公的な業務目的よりも優先するエイハブは、部下達にとって神 (の代理) どころか地獄の墮^{ルシファー}天使に相当しはしないだろうか。「天から墮ちたすべての天使達が一斉に憑依したかのようなだった (combinedly possessed by all the angels that fell from heaven (p. 567))」とのモビー・ディックへの評価は、一字一句変えない

まま即座にエイハブに転用されないだろうか。

巨大鯨とエイハブとの激闘は字義通りの次元での、つまり物理的・身体的次元での激闘ではない。むしろ心理的次元での激闘である。途轍もない巨体を誇るモビー・ディックの全身を覆う白さが、「全滅という発想を背後から我々に突きつける (stabs us from behind with the thought of annihilation (p. 195))」のだから、モビー・ディックは、強靱で破壊的なもの、つまりフロイトに言わせると、無意識的なタナトスと呼ばれる死の欲動の象徴として機能している可能性がある。こう言ってよければ、タナトスを代理表象するのが白鯨だとすれば、白鯨と同様に、ネガティブな次元での強靱な意志をもつエイハブもまた、タナトスそのものではなからうか。前節にて言及したフルリーの評言を繰り返すと、「精神分析では、言表と事実が一致する必要はまったくない」のだから、鯨が鯨ではなくエイハブの精神性を言表することは、十分にあり得るはずだ。つまり能^{シニフィアン}記としての白鯨が象徴するのが、書^{シニフィエ}記としてのエイハブの死の欲動なのである。この論理からすれば、タナトスをインターフェースとして、モビー・ディックとエイハブの二者はアイデンティカルな関係——こう言ってよければ不気味な「分身」同士としての関係——を構築する共存在者である、という作業仮説をここに設定することが可能ではあるまいか。

「目に見えるもの、すべては張りぼての仮面に過ぎない……もし倒そうと思うなら、その仮面を打ち破れ (All visible objects, man, are but as pasteboard masks. . . . If man will strike, strike through the mask! (p. 164))」と、エイハブは乗組員達を前に檄を飛ばす。仮面を壁に読み換えたと、囚人は壁をぶち破らないと外には出れないだろう。俺にとっては、俺のそばに立ちはだかる白鯨がその壁なんだ (How can the prisoner reach outside except by thrusting through the wall? To me, the white whale is that wall, shoved near to me (p. 164))」とまで言い放つ。しかも「俺にはわかる。奴のなかに桁違いの力があって、計り知れ

ない悪意がその力を強靱にしている (I see in him outrageous strength, with an inscrutable malice sinewing it (p. 164)) (強調筆者)」と、続ける。だが、白鯨と同様に「計り知れない悪意」をエイハブも隠し持っているとしたら、どうだろう。先述の作業仮説を繰り返すが、白鯨とエイハブがアイデンティカルな存在であったら、どうだろう。白鯨という「仮面」を打ち破ったとき、そこにエイハブが悪意を秘めた顔を覗かせていたとしたらどうだろう。実際に船と乗組員達の安全確保など眼中になく、本来は無関係な乗組員達を無理やり巻き込んで、エイハブは復讐相手の白鯨と自分が両成敗されるのを本望とするような、死の欲動に突き動かされている。この欲動がエイハブの「計り知れない悪意」——死と破壊の欲動であるタナトス——でなくて何だろうか。エイハブをA、白鯨をBとすれば、A=not Bを大前提に、AはBの死を願った。ところがA=not Bとする大前提が崩れ、A=Bだとすると、AがBの死を願うことは、とりもなおさず、Aは自己Aの死を願うことになるわけだ。Aの死はAだけでは終わらず、イシュマエルを除く取り巻き全員の死だから集団虐殺に相当するから、エイハブは「計り知れない悪意」を抱いているのだ。このようにエイハブがモビー・ディックに放つ呪詛の言葉は、ブーメランのように反転して本人に回帰するはずであり、我々としてはエイハブが被った仮面を打ち破り、引き剥がさなければならないだろう。

「計り知れない悪意」というフレーズのなかの「計り知れない(不気味な)」とは、フロイトの指摘通り、エディプス・コンプレックスとの関係性が強い。エディプス・コンプレックスは抑圧されるが、解消されないまま無意識として残存していれば、それは本人の意志的(理性的)統合力の働きが鈍くなる危機的状況時、あるいは非日常的でグロテスクな異常事態が(、即ち、神経症状として)現出したときに、意識に回帰する。抑圧したエディプス・コンプレックスの回帰を契機に、「不気味さ」はしばしばドッペルゲンガー(ダブル、分身)として現出するのである。本作で言えば、ドッペルゲンガー

的關係性にあるのは、エイハブとモビー・ディック（をはじめとする鯨類）である。

エイハブ (A) の食われた彼の片足はモビー・ディック (B) の体内にあるから B/A なる算式で表記される。エイハブは存在しない足の代わりとして、「磨き上げられた抹香鯨の顎骨を加工して作られた義足 (his bone leg ... fashioned from the polished bone of the sperm whale's jaw (p. 124))」をつけている。エイハブ (A) の一部は既に鯨 (B) なのであるから A=B/A である。こうしてエイハブは「他性」を取り込み、エイハブが〈抹香鯨 / モビー・ディック〉とアイデンティカルになってしまっている。双方が双方のドッペルゲンガーである。モビー・ディックが「不気味なもの」ならば、エイハブも「不気味なもの」であり、後者の「不気味さ (/ 圧倒的な凄み overbearing grimness (p. 124))」が前者に起因することは、「エイハブの半身を支える獐猛な鯨の白骨でできた義足がその要因 (owing to the barbaric white leg upon which he partly stood (p. 124))」、と語るイシュマエルにも見透かされている。もっともエイハブには虎の威を借りた狐的なところがなかったわけでもあるまい。ただ確かに言えることは、白鯨が悪の化身リヴァイアサンとして神 / 父に抗うがならば、白鯨とアイデンティカルなエイハブも父なる神に抗っているわけで、この論理でいけば、エイハブのエディプス・コンプレックスは白鯨に具現化されるほど途轍もなく大きい、と言えよう。異常なまでに巨大な体躯の白鯨と異常なまでに肥大化したコンプレックスをもつエイハブは、その異常さゆえに怪物的なのである。

子供が理想的家族として抱く空想を、フロイトはファミリー・ロマンス¹³と名付けた。『白鯨』は直接的な家族空間が描写されてはいない。いやだからこそ、海洋小説でありながら家族から強い影響を受けているわけで、作品は〈反ファミリー・ロマンス〉として理解されるような物語構造をとってはいないだろうか。すでに引用した個所を繰り返すが、「目に見えるも

の、すべては張りぼての仮面に過ぎない……もし倒そうと思うなら、その仮面を打ち破れ」、とする仮面ロジックが有効ならば、海洋小説なる「仮面」の下には〈反ファミリー・ロマンス〉が潜伏しており、我々読者は海洋小説の「仮面」を打ち破ることが求められているのではなかろうか。海洋小説仕立てにしたのは、メルヴィルの無意識が成せる陽動作戦ではなかったか。

そもそも鯨の生息域は大海原であり、名詞をジェンダー化するフランス語では海（Mer）は女性扱いで、女性用の定冠詞（la）を付して使われる。綴りとしては母親（mère）のそれと酷似し、発音も同じだ。つまり、白鯨が象徴する父親（男性）原理とは対蹠的な母親（女性）原理を意味するのが海である。その海は無意識を表象する。旧約聖書が取り込んだヘブライ神話でも、海は「無意識と無秩序、咆哮する無限」¹⁴と捉えられている。一方、エイハブにとって、母親が愛情を息子にあてがうことを断固として認めない厳格な父親イマゴが、フロイトが言うところの「不気味なもの」として変容した巨大な白鯨として表象されている、と推察されはしまいか。そしてこのとき、巨大な白鯨に対して、未熟そのもので無力な子鯨のポジションに、エイハブが降格させられてしまう可能性が浮上しはしまいか。その一方で、モビー・ディックとエイハブとが〈二重写し/分身〉になる可能性が高まっている。エイハブはモビー・ディック同様に、父権的階層システムの最上位を占め、権力をほしいままにして、傍若無人に振舞うから、海の王者モビー・ディックと重なるのである。なおエイハブ同様に暴君として描かれる旧約聖書『列王記上』アハブ王（King Ahab）を想起させるエイハブという名は、ヘブライ語で語源的に「父の兄弟」を意味するというから、¹⁵ ポー（Edgar Allan Poe, 1809-49）の分身小説「ウィリアム・ウィルソン」（“William Wilson”, 1839）や、父なる神の愛をめぐるカインとアベルのような兄弟間の争い、フロイトが注目する父亡き後の兄弟間の争いというエディプス関連事象と直結し、実に興味深い。

3. B. 白鯨的属性を帯びた暴力的な父としてのエイハブ

作品からの以下の引用は、まさに幼児が、父親によって、自分を抱く母親から容赦なく引きずり離されるエディプスの場面を想起させる。それはまさに〈反ファミリー・ロマンス〉の一場面である。そこでは、船長として、部下に命じ〈幼児 / 幼鯨〉を母鯨から無理やり引き離すエイハブが、横暴極まりない父親と酷似したさまを曝け出す。

Starbuck saw long coils of the umbilical cord of Madame Leviathan, by which the young cub seemed still tethered to its dam. Not seldom in the rapid vicissitudes of the chase, this natural line, with the maternal end loose, becomes entangled with the hempen one, so that the cub is thereby trapped. (p. 388)

この子鯨は母鯨と自分とを結びつけていた唯一の命綱——子宮内では母親から養分の供給を受ける生命維持装置であったもの——のせいで、皮肉にも命を落とす。このとき母親も銛師から受けた大きな傷を乳に負う。そのせいで子鯨を育てることは不可能になり、子鯨は衰弱し息絶えるのである。しかしそうなる前に子鯨は銛に付けられた麻網と絡み合った臍の緒で窒息死している。なお麻 (hemp) には戯言として「絞首索」の意味があることを付言しておく。ともあれ、銛打ち達による鯨母子への残虐非道振りは正視に堪えない。そもそもキリスト教文化圏にあっては、マリアが幼子のキリストを抱く聖母子像、あるいは十字架にかけられた後の死したるキリストを抱くマリアを描いた聖ピエタ像によって、母子関係は著しく美化されているし、本作執筆時代といえば、家庭の〈主婦 / 母親〉を神聖視するドメスティック・イデオロギー全盛期である。¹⁶ それが今、ブラック・ジョー

クの域を超え、禁じ手を使って聖母子イメージを完膚なきまでに穢すのだから、読み手の不快感と不安感はいや増しになる。

不気味な父親的イマージとしてのエイハブ、(捕鯨業にいそしむ)人間の代表としてのエイハブは、実に残虐極まりない。なにせマルクス(Karl Marx, 1818-83)的観点からすれば、エイハブの監督下で捕鯨に勤しむ漁師達はエイハブの手となり足となって動く被搾取労働者に過ぎず、彼等が母親の乳を放った銚で傷つけたのは、その部位を意図的に狙ったかどうかはさておき、母子鯨への攻撃はあくまでもエイハブへの忖度を図ってのことなのである。部下は「主体」ではなく、エイハブの意志の代行者(agent)である。単なる〈行為体(agency) / 非人称的個体〉に過ぎない。

When by chance these precious parts in a nursing whale are cut by the hunter's lance, the mother's pouring milk and blood rivallingly discolour the sea for rods. The milk is very sweet and rich; it has been tasted by man; it might do well with strawberries. (p. 388)

この引用では、傷を負った乳から迸り出る母乳と血液が、捕鯨に勤しむ漁師達——エイハブのサディズムを反映する漁師達——にとってはあたかも美酒であるかのように、喉を鳴らし浴びるほどに飲むさまが、描かれている。「苺でもあれば、申し分ない(it might do well with strawberries)」とまで書かれている。このさまは、グロテスクの極致だ。こう言ってよければ、他者の不幸を文字通り食物にしてまで自己の口腹の欲をほしのままにする破壊的で見苦しいエイハブの欲動が、部下を通して剥き出しになっているわけだ。ここでエイハブのタナトスと対になったモビー・ディックへの復讐心と執念深さが、モビー・ディックを通して代理表象される事実——「復讐、迅速な報復、永遠の悪意が彼[白鯨]の全体に宿っていた

(Retribution, swift vengeance, eternal malice were in his whole aspect (p. 571))」——に注目したい。前節 (3. A) で議論したようにエイハブとモビー・ディックはアイデンティカルで分身関係にあり、両者はともにサディスティックな父親イマージョを象徴するのである。エイハブは母子鯨にも容赦はなく、モビー・ディックはエイハブの部下達にも容赦はない。

3. C. 無力な幼鯨に類比的関係性を見せるエイハブ

だが、王者としてのカリスマ性を備えているはずのエイハブも、死を迎えるときのさまたるや、情けなく、みじめなもので、そこには荘厳さのかけらもない。

The harpoon was darted; the stricken whale flew forward; with igniting velocity the line ran through the grooves;--ran foul. Ahab stooped to clear it; he did clear it; but the flying turn caught him round the neck, and voicelessly as Turkish mutes bowstring their victim, he was shot out of the boat, ere the crew knew he was gone. (p. 572)

上記の引証と、幼鯨が臍の緒に絡まり窒息死する場面を描いた先の引証から明らかなように、幼鯨の臍の緒が、捕鯨業に於いては銚のロープに対応することが見て取れる。臍の緒の場合は母親からの栄養摂取を幼鯨に保証し、銚のロープの場合は天然資源としての鯨がもたらす富と利益を捕鯨漁師に保証する。臍の緒を切断され幼鯨の首が絞められたのは、人間（エイハブの命を受けた捕鯨漁師）のせいである。この論理で進めていけば、ロープ状のもので殺される点で、エイハブを幼鯨と同じ座標に定位することができるだろう。なお、キャメロン (Sharon Cameron) を引証するバレッツ

ト (Laura Barrett) は、幼鯨の切断された臍の緒をエイハブの首ではなく切断された足に対応させているものの、幼鯨とエイハブの同一性を確認している点で、¹⁷ 拙論はバレットと意を同じくする。

殺害する父的存在者		殺害される息子的存在者
エイハブ (の命を受けた銚師達) A	→	子鯨 b
モビー・ディック B	→	エイハブ a

上の表で示すように、エイハブは哀れな幼鯨と類比的な位置に、つまり〈幼鯨/幼児〉としての位置にエイハブが置かれている (a=b) ことが判明する。一方、捕鯨漁師を統括するエイハブの首を銚のロープで絞めたのは、鯨の怪物モビー・ディック (B) である。子鯨 (b) の首を臍の緒で絞めたのは、事実上、エイハブ (A) である。エイハブ (A) とモビー・ディック (B) は暴君的な男性の位置を占めるから、両者がアイデンティカルな存在 (A=B) となっている。ここに不気味な転生が発覚する。さらに、もうひとつ不気味な現象が同時に発生する。呪われた永劫回帰である。エイハブは父親 A なのか、はたまた幼児 a なのか、〈大人 A/父親〉でありかつ幼児 a であるエイハブ (A=a) の場合、アイデンティティの見極めが不可能となり、「不気味」なのである。しかもフロイトによれば、「不気味な現象」は反復を特徴とするという。エイハブの場合も、乳幼児から少年、少年から青年、青年から成人へのサイクルを何度も不気味に反復するという永劫回帰に呪われている以上、『白鯨』に於いても作品空間はエディプスの影に覆われているわけである。

3. D. サディスティックなナルシシストとしてのエイハブ

不思議なことに、残虐な家父長的男性といえども、エイハブには妻を思いやる良き夫としての側面がないわけでもない。だからエイハブは不気味なのである。「齢、五十を過ぎて小娘を娶ったんだが、翌日にはケープホーンに向けて出港よ。初夜の枕に窪み一つ残してね。いや妻なんだろうかね？妻でよかったろうか？夫は生きていてもむしろ〔妻は〕寡婦も同然。そうなんだ、スターバックよ、結婚と同時にあの哀れな娘を寡婦にしまったのよ。(that young girl-wife I wedded past fifty, and sailed for Cape Horn the next day, leaving but one dent in my marriage pillow-wife? wife?--rather a widow with her husband alive! Aye, I widowed that poor girl when I married her . . . (p. 544))」などと、にわかにな弱気になり、腹心の部下であるスターバックを相手に殊勝にも若い妻への気遣いをしてみせる。一人息子にも思いを馳せ、「今はかなたの海洋にどれほど遠くまでさまよっているにしても、息子をあやしに戻ってくる (how I am abroad upon the deep, but will yet come back to dance him again (p. 544))」と、父親らしい側面を出すことも忘れない。

だが、それでもやはり、エイハブにあっては父親的な資質よりも、唯我独尊的な発言が鼻につき、人格的成熟度が疑われるのである。エイハブは自分の要求を最優先に置かないと気が済まない。前日に遭遇した白鯨を追撃中に海に投げ出され、十二歳の息子——ちなみにメルヴィルが十二歳の時、父親が狂い死にしている——が行方不明になってしまったガーディナー (Gardiner) 船長が、「四十八時間でいいんだ。そちらの船を貸していただけないだろうか。喜んで金は払う。きっちりとね。……四十八時間でいいんだ。ただそれだけだ (For eight-and-forty hours let me charter your ship—I will gladly pay for it, and roundly pay for it . . . for eight-and-forty hours only—only that . . . (pp. 531-32))」、とエイハ

ブを呼び止め、「あんたにも息子がいるだろ (For you too have a boy)」、と情に訴えて、「だから、あんたはそうしなくちゃいけないし、そうさせてもらうよ (you must, oh, you must, and you shall do this thing (p. 532))」と、船長としてのプライドなどかなぐり捨てて、エイハブに泣きを入れる。しかしエイハブの意識には支援すべき他者は存在しない。ポーレン (Edelman Boren) いわく、「追い求める対象から自らを引き離してしまう恐れのあるものよりも [自分の目的を] 優先 [せねばならない] (significance over whatever threatens to separate him from the object of his quest)」¹⁸ とは、この場合、まさに言い得て妙である。先述したように、自分のすべての要求に応じてくれるような母親、もしくは自分が上位者として自分に服従することを命令できる部下達だけが存在する世界に生きているのが、エイハブである。エイハブは近づいて来ようとするガーディナーに向かって、無情にも「来るな (Avast (p. 532))」と突っぱね、「索の子一本にも触れるな (touch not a rope-yarn (p. 532))」と言い放ち、白鯨追求という自分の目的を最優先させる。

「父親であって、父親ではない」エイハブは、エディプス問題を未解決のまま抑圧してきたので、片足を失うというトラウマ的場面に繰り返し立ち返り、〈成熟した大人 / 父親〉にはなれないのである。エリクソン (Erik Homburger Erikson, 1902-94) の発達心理学では、¹⁹ 基本的に人は着実にステップを踏んでいくことが可能であることを前提にしたうえで、年代毎の段階で設定されている課題を克服するのに必要とされる対人関係能力、対社会関係能力を論じるが、エイハブの場合、発達心理学は馴染まない。対人、対社会関係能力の涵養が期待できないナルシストであるから、泉に映る私の顔を見つめるギリシャ神話のナルシス青年のように²⁰ 「昇降口から出て甲板をゆっくりと横切りながら、エイハブは舷側にもたれかかり、自分の影が海中に、そして凝視する自分の目に、どのように沈み込んでいくのかを眺め、ますますもってその深さを測りとうと

した (Slowly crossing the deck from the scuttle, Ahab leaned over the side and watched how his shadow in the water sank and sank to his gaze, the more and the more that he strove to pierce the profundity (p. 543))。このように「大人であって小児的ナルシスト」であるのがエイハブであるから、不気味であること、この上ない。真理値論理ではあり得ない等式 $\langle A = \text{not } A \rangle$ 、 $\langle \text{成人としての } A = \text{成人ではない } A \rangle$ が成立してしまうために、不気味なのである。エディプス・コンプレックスを乗り越えられない独裁的権力者の幼児性に、命を託す乗組員達の不安はいかほどか。

さらに言えば、不気味なこととは、水面に映るエイハブのナルシスの自画像が、モビー・ディック的でもあることだ。[[モビー・ディックは] エイハブ自身の複雑な内なる自己の投影 (a projection of his complex inner being)] であるものの、「エイハブにはその自覚がない (Ahab himself is unaware of it)」——ディリングガム (William D. Dillingham) によるこの指摘をユング流に説明し直すと、エイハブは自分の残虐な負の部分——影の自己 (Shadow Self) ——を白鯨に投影するだけで、「影の引き戻し」²¹ などはしていない、と解される。エイハブは自らを復讐者、モビー・ディックを復讐相手として峻別しつつ、その一方でパワーの象徴たるモビー・ディックとの合一も図る。この矛盾する行為は無意識レベルでの実践だから、自覚されることはない。

4. 霧散する不気味な影

いみじくもマイルダー (Robert Milder) が指摘するように、²² イシュマエルは距離をおいてエイハブを眺めている。捕鯨船レイチェル号——行方不明の息子を探すもエイハブによって撥ねつけられたガーディナーが船長を務める——は、その船名通りに聖書のラケルに擬人化されている。そ

の時点では、エイハブの女性嫌悪症的 (misogynic) なスタンスのもとで、つまり家父長主義のもとで、犠牲を強いられる(考えを異とする)他者(ラケルによって代表される)女性)の末路をイシュマエルは目で追うことしかできない。「依然として進んでは止まり、止まっては進みながら、嘆くようにぐるぐると旋回し……明らかにわかるが、この船は涙を流すかのようにしぶきをあげながらも、やはり慰みを得ることはない (by her still halting course and winding, woeful way . . . you plainly saw that this ship that so wept with spray, still remained without comfort (p. 535))」とイシュマエルは、当時の女性流行作家達が常套手段としていた感傷主義的タッチで書き記し、レイチェル号に寄り添う姿勢を見せている。

捕鯨船から海に放り出されたイシュマエルのそばで「あたかも南京錠がかかったみたいに口を閉じて、危険の危の字もない鮫達が音もたてずに滑るように泳ぐし、獐猛な盗賊鷗は嘴を内に収めて飛んでいた (The unharming sharks, they glided by as if with padlocks on their mouths; the savage sea-hawks sailed with sheathed beaks (p. 573))」とあるように、イシュマエルの非暴力性は鮫と盗賊鷗が代理表象している。イシュマエルにあっては、暴力性が削がれていて、エイハブとモビー・ディックが象徴するマチズモは否定されているのだ。マチズモは、自己のパワーを誇示する過剰補償に他ならない。過剰補償とはアドラー (Alfred Adler, 1870-1937) の用語で、自分の劣等感を帳消しにするため、虚勢を張るなどネガティブな副次効果をもたらしてしまうまでに主体が不必要な奮闘をしてしまう姿勢を意味する。²³ エディプス・コンプレックスがもたらす劣等感——つまり、自分 (A) は自分の母親や自分の姉妹からの (こう言ってよければ女性陣一般からの) 信望が厚い父親と異なり、非力で男としての魅力に乏しい無価値の人間 (B) かもしれない、という救い難い劣等感——を、マチズモは拭い去る (A= not B) からだ。そのマチズモをイシュマエルが否定するとは、エディプス・コンプレックスを再生産する土

壊たる父権制（男性中心主義）を受け入れず、バロス（Deborah Paes de Barros）の評言を借用すると「脱エディプス化（de-oedipaliz[ation]）」²⁴を推進することを意味する。むしろ逆に女性的母性的原理をイシュマエルは選択し受け入れ（A=A/B）、持続可能な生に希望を託すのである。世間から拒否されてもしたたかに生き延びようとする作家は、レジリエンス（resilience）をもつイシュマエルにラカンの言う「自我理想（Ego Ideal）」を見ようとしている。なお自我理想とは、次節で言及する「理想自我（Ideal Ego）」とは異なり、大文字の他者の影響を受け、自分を評価・監視し、象徴界にかかわるものである。

5. 不気味な存在の暫定的効用

エイハブは片足をもぎとったモビー・ディックに挑戦状を叩きつける。エイハブはモビー・ディックを死に至らしめようとする衝動に突き動かされる半面で、海の王者としてのモビー・ディックがもつ特徴たるマチズモを自分も纏いたい、いやモビー・ディックそのものと同一化したい、と無意識裡に欲する欲動さえも見せる。それは抹香鯨の骨を義足としてエイハブが身体の一部とすることのうちに象徴的に現出している。ラカンによれば「理想自我」との同一化を図るのが鏡像段階だとされ、想像界にかかわる。鏡像段階的現象は乳幼児が鏡に映る自己の像を見て、初めて自己の統一性を確認する現象であることが強調されるため、発達心理学的に矮小化して理解されてしまうきらいがある。鏡像的現象は成人期以降にも頻出する現象であり、成人であっても人は他者を鏡にすることにより、他者の中に自己像を見出そうとするのである。ラカンが精神分析研究に端緒を開かせることになったその典型例が、パラノイア性精神病患者のエメ（Aimée）である。エメを診断したラカンによれば鏡像的同一化に於いては、羨望と嫉妬、愛と攻撃が交錯し、「いずれが本体（主人）で

いずれが写し（奴隷）かを決定する」うえで、「私」と鏡像は、主人性を争って相克的にぶつかりあう双数的関係（relation duelle）にある」という。自己の被支配性を認めず、徹頭徹尾、自己愛的なのである。²⁵ だから、エイハブの目に映じる他者（モビー・ディック）は憎き復讐相手であるにもかかわらず、ラカン精神分析学でいうところの鏡像であり、エイハブの「理想自我」を体現するわけだ。だからこそ、ウッドソン（Thomas Woodson）の評言を借りると、「エイハブと〔宿敵である〕モビー・ディックとの狂おしいばかりの一体化（the tormenting identification and fusion of Ahab with Moby-Dick）」現象が現出するのである。²⁶ エイハブはモビー・ディックを破滅へと追い込みつつも、マチズモを具現するモビー・ディックと一体化することを目指す^{パラノイア}偏執狂者である。

よって、エイハブはナルシシズムや自己認識に基づく「自我」を鏡像段階に求めるが、その先の段階、つまり他者との関係性の意義を理解する象徴段階での「主体」を求めようとはしない。部下達の目には船上に於ける神に等しき存在に映っても、実際には無力な幼児のままで一生を終える不気味な存在がエイハブなのである。彼のアイデンティティは、 $A=A/B$ として、つまりAは成人としてのエイハブ、Bは幼児としてのエイハブ、として表記されてしまうのである。

フロイト的に捉え直すと、母親と二人だけの世界に留まっていられる段階ならば、幼児は全能感に心酔することも許容されるのだが、その至福の世界に侵入した父親により幼児は母親から引き離され、いきおい幼児は自分の無力感を思い知らされるという。そこで防衛機制を発動させた幼児は、いや精神的情緒的に幼児のままで時だけをいたずらに浪費したエイハブのような成人は、その無力感を帳消しにし、過剰補償として、カリスマ的な（人）物との一体化を望むわけだ。そうすることで、今度は自分がカリスマ的ヒーローになれるという妄想に浸るのであるが、これは建設的なスタンスではない（かもしれない）。

今、「かもしれない」と歯切れの悪い言い方をしたのには訳がある。エイハブにとっての白鯨が一体化の対象であるとすれば、メルヴィルにとっての一体化の対象は、『白鯨』の献辞にその名を記して讃えたホーソンではなかったか。ちょうどイシュマエルがエイハブの放つカリスマ性に心酔したように、メルヴィルもホーソンに規格外のカリスマ性を嗅ぎ取っている節が見受けられるのだ。カリスマ的な人間は、自身のキャパシティがもつスケールの大きさを誇示するところがある、とメルヴィルは妄想する。メルヴィルからすれば、「天国、地獄、俗世の群雄達が割拠するなかであって、ロシアや大英帝国のように、外的な力による支配を受けない主権が（自分の内界には）あるのだ、と高らかに宣言する人間（the man who, like Russia or the British Empire, declares himself a sovereign nature (in himself) amid the powers of heaven, hell, and earth (Corr., p.186)）」が、ホーソンである。そして「彼 [ホーソン] は恥ずことのない対等な立場であらゆる権力者達に臨むのだと言い張る (he insists upon treating with all Powers upon an equal basis (Corr., p.186))」のだ、という。このようにホーソン宛ての手紙でホーソンの誇大妄想性をあからさまに賛美してみせるのだが、そのような誇大妄想癖はホーソン本人には希薄だったと思われるから、自分ない誇大妄想癖を讃えられるとは、メルヴィルがホーソンを買い被ったからであり、ホーソンにとってはとんだ有難迷惑でもあるだろう。だがメルヴィルによりホーソンの属性とされた誇大妄想的な性癖は、まさにエイハブ的だ。メルヴィルはエイハブ的なホーソンとの合体を夢想しているのである。だからこそ、手紙のなかで、一体化した二人の姿を妄想し、「あなたの心臓は私の胸のなかで、私の心臓はあなたの胸のなかで脈打っています。両方とも、神の胸のなかにあります (your heart beat in my ribs and mine in yours, and both in God's (Corr., p. 212))」と書いてみせ、躊躇うことなく同性愛の匂いさえもそこに漂わせる。ちなみにヘブライ語による動詞「愛する

(love)」は *ahav* (*ahab*) (אָהַב)、名詞「愛」は *ahavah* (אֲהָבָה) であり、²⁷ その語用範囲は同性愛をカバーできるくらいに広く、たとえば、『サムエル記下』1章26節では「わが兄弟ヨナタンよ……あなたがわたしを愛するのは世の常のようでなく、女の愛にもまさっていた。(your love (אֲהָבָה) to me was wonderful, passing the love (אֲהָבָה) of women)」のように使われている。一方、モビー・ディックは確かに男性的ではあるが、「乳のように真っ白な巨体の恐ろしいくらいの美しさ、水平線で輝く太陽に照らされながら、朝の真っ青な海原に生きたオパールのように輝きを拡散する (the appalling beauty of the vast milky mass, that lit up by a horizontal spangling sun, shifted and glistened like a living opal in the blue morning sea (p. 256))」と記されるような女性的な美しさ——ナンシー的には内なる「他性」——兼ね備えた両性具有的特質 (A=A/B) をもつ事実を、クリストファー・ステン (Christopher Sten) などは見落とさない。²⁸ このように両性具有的特質を介して、〈海/無意識〉の王者=モビー・ディックと、〈アメリカ文学の巨匠/周囲の男達から女性的な美しさを持つと言われたホーソン〉²⁹ とが、メルヴィルにとっての「理想自我」として奇妙にも繋がり合ってしまう。と同時に、エイハブのアイデンティティは、モビー・ディックが具現する男らしさ (そしておそらくはマチズモを支える異性愛主義) を追求し誇示をすることで証明される、とブロードヘッド (Richard H. Brodhead) が指摘する本作の主題は、³⁰ イシュマエルによって否定されるばかりか、作者によるホーソン宛の同性愛が濃厚に漂う手紙によって、見事に反転させられてしまうのである。こういったジェンダー・ノームと表裏一体の関係にある強制的異性愛主義が破綻している事実を、作品と手紙は読者に見せつける。ここに、女性的原理を進んで受容する作家の姿 (A=A/B) を、垣間見ることができないだろうか。エディプス問題と内なる女性性 (B) を、抑圧する従来の父権主義 (A=not B) と表裏一体のマチズモに批判的な作家の姿勢を垣間見る

ことができないか。このような作家の姿勢は、19世紀前葉に罰する父なる神を奉じるピューリタニズムから、寛容で女性的な神を奉じるエヴァンジェリカリズム（福音主義）に向かうパラダイム・シフトが進展した³¹ 宗教的趨勢にも連動していただろう。

結語の試み

緒言で述べたように本論考の執筆目的は、作家としてのメルヴィル自身がイシュマエルの語りを通して、「不気味な〈エイハブ/モビー・ディック〉」にどのようなスタンスで対峙したのか、を明らかにすることにあった。その際、本作をアレゴリーとして捉え、精神分析の視座から分析を進めた。というのも、言表と事実が必ずしも一致する必要がないことを前提とする精神分析は、本来の字義レベルを超えた先に指示対象を据えるアレゴリーに一脈通じるところがあるからだ。エディプスのトラウマを典型例とする、近いが異質な他性（外密）が「抑圧され」、その内なる外部が再び回帰するとき、それは「不気味な」様相を伴って現出する。別言すれば、十分に理解していたはずの対象が、その不動のアイデンティティに想定外の揺れと亀裂を見せ、潜在していた異質な要素が「不気味なもの」として顕在化するのだ。そして今回、精神分析がポスト構造主義の力を借りたうえで、作品解釈のツールとしての真価を光らせたのは、「不気味」という意味でエイハブと白鯨とが同一の存在であることを浮き彫りにしてみせたことである。白鯨がその凶暴性から不気味であることは当然だが、尋常ならぬカリスマ性を帯びたエイハブもまた不気味である。エイハブは白鯨にも通じる横暴で権威的な家父長男性のイメージを備えている一方で、捕鯨漁で犠牲になる幼鯨にも似た無力な幼児である、という矛盾を抱え込む存在であるから、さらに不気味なのである。実際、老人から幼児に回帰し再び老人に戻るという出口のないサイクルを繰り返すと、エイハブ本人も半ば自覚

している。おそらく神経症では決して珍しくはないフロイトが言うところの「反復強迫」であり、³³「願望充足の試み」なのだろうが、彼はエディプスのトラウマの場に繰り返し立ち戻る。³⁴ こうして不気味さの分析を進めるなかで、エディプスのトラウマにより常軌を逸脱した自称狂人の不気味な老人エイハブ——無限なる権能と神格性が自らに備わるもの、と過信するマチズモなる誇大妄想に陥った幼兒的エイハブ——の精神風景を描写する〈反ファミリー・ロマンス〉が、『白鯨』のベースにあると推察された。

語り手のイシュマエルを通してメルヴィルが綿密に観察するのが、エイハブと〈彼のドッペルゲンガー/不気味な怪物〉的な白鯨との関係性——もはやエイハブには許されない幼兒的全能性を白鯨が代理表象している、という分身的な関係性——である。全能性について言うならば、エディプス的な危機を乗り越えていない者の場合、克服しがたい喪失感——全能性を奪われたという喪失感——をマチズモで過剰補償しようとする。同様に、理想自我としての〈鏡像/白鯨〉以外は視界に入らない幼兒的ナルシストたるエイハブもまた、絶対君主的な権力を振りかざし、部下達を労働搾取するばかりか、勝ち目のない白鯨を相手に集団虐殺^{ジェノサイド}に等しい総員玉砕を強いることで、ネガティブなマチズモを醸成する。ただ彼にあって未解決のまま抑圧されて残存するエディプス・コンプレックスは、グロテスクに形を変えて頻繁に噴出する。実際、エイハブと白鯨の関係性という形になって発現する。エイハブにとって失った全能性を保持する憧れの対象が白鯨であり、彼の全能性を奪ったのが白鯨なのだから、白鯨はエイハブにとって憎しみの対象でもある。羨望と憎悪、この関係性はグレゴリー・ベイトソン (Gregory Bateson) 言うところの「二重拘束」^{ダブルバインド}的な³² 様相を帯びたもので、ヘーゲル (Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1831) 言うところの止揚^{アウフヘーベン}³⁵ は不可能である。さらに言えば、両者の分身的関係性は、人間と鯨という種を超えた不気味な輪廻転生現象である。なおかつ、この現象にあってエイハブは老人でありながら、もはや存在しえない幼兒期の

全能性を奪還しようとする定型的行動を永劫回帰的に反復し、実質的に幼児段階に退行している。つまり白鯨を殺害し、白鯨が具現する男性性（全能性）を我有化することに資する行動だけを、繰り返す。無益な自動化行動に突っ走るエイハブは、死への欲動に衝き動かされ、生産的な主体性を放棄する。悪の象徴としてのリヴァイアサンと同定されるのが白鯨だから、白鯨征伐の所業は自身の神性に適うものとエイハブは誤信し、19世紀アメリカ社会の父権的イデオロギーなる追い風を受け、いたずらにマチズモ意識だけを高揚させる結果となる。

一方、イシュマエルはエイハブとは異なり、死の欲動^{タナトス}に身を委ねることはせず、女性的原理を自身に組み込み生き延びる。同性愛の相棒で、南洋の人食い人種——「文明化」された欧米のインテリには不気味な異人種で異質な他者——だとされるクィークエグ (Queequeg) が作った「棺桶」につかまることで、死の可能性と自己の有限性を受け入れながら、イシュマエルは衰弱していても溺れることなく生き延びる。ちなみにラカン的視点からは食人主義^{カニバリズム}は禁忌を破ることを意味するから、クィークエグの存在は結果的に象徴界の法・秩序の破壊、欧米の父権的な強制異性愛主義の否定、ひいては「脱エディプス化 (de-oedipaliz[ation])」の導入につながる。その過程で〈陸/日常的世界 (ノ意識界)〉を離れた〈海/非日常的・黙示録的世界/理不尽な無意識界〉に投げ出されることで臨死体験をするも、見事に再生を図ったのが、イシュマエルである。彼はタナトスではなくエロスを選択したのである。

本作品を世に問うたために文壇から見放されることになるも、死の直前まで創作にいそしんだメルヴィルの作家としてのレジリアンスを、持続可能性を是とするイシュマエルのスタンスの内に見て取れはしないだろうか。ただ、そこに保留条件がつく。つまりメルヴィルは自分のスタンスを実現した理想の人物 (自我理想) としてイシュマエルを造型しつつも、ホーソーンの放つ魅力、つまり文芸分野での巨匠としてモビー・ディック的存

在（理想自我）であるホーソーンの放つ魅力——功罪半ばする両価的（不気味な）インパクトを放つ魅力に、メルヴィルは惹きつけられた。当のホーソーンはメルヴィルから距離を置くようになったのに、メルヴィルは、エイハブがモビー・ディックにそうであったように、ホーソーンに、生涯、呪縛され続けた。³⁶ 〈エイハブ/モビー・ディック/暴力肯定で破壊的な男性原理/異質な他者に対する排除的スタンス〉を断じつつ〈イシュマエル/ホーソーン/生産的な女性原理/異質な他者にも受容的なスタンス〉^{イクスクルーシブ}を擁護するはずなのにメルヴィルは、本来ネガティブな価値をもつモビー・ディック的な巨大な存在に、ポジティブな価値を創出するホーソーンを重ね合わせてしまう、という不気味な精神機制を構築してしまう。皮肉にもゴシック小説家としての真骨頂を『白鯨』にて発揮するも、自らをゴシック化してしまった。どうやらスターバックによるエイハブへの諫言——「ご自身にお気を付けるがいいですぞ。（[L]et Ahab beware of Ahab; beware of thyself, old man. (p. 475)）」——は、むしろメルヴィル自身に該当する、という可能性が作家の意識から抜け落ちてしまったようである。こうして皮肉にも、人々にとっての閾値下の次元で、自分が「理解しがたい幻（ungraspable phantom (p.5)）」つまり不気味な存在に変容してしまうことで、メルヴィルは結果的に死後半世紀に至るまで人々から黙殺される遠因のひとつを招いてしまったのではなかろうか。

Notes

- 1 テキストとしては Herman Melville, *Moby-Dick: or The Whale*, eds. Harrison Hayford, Hershel Parker, and G. Thomas Tanselle, Northwestern UP, 1988. を使用し、本文中での引用はページ数を括弧内に示す。手紙については Herman Melville, *Correspondence*, ed. Lynn Horth, Northwestern UP, 1993. を使用。聖書『イザヤ書』は Word Project. <https://www.wordproject.org/bibles/jp/23/27.htm> から引用し、『サムエル記下』も Word Project. <https://>

- www.wordproject.org/bibles/jp/10/1.htm に依った。2024年11月8日アクセス。
- 2 Megan Mulder, “*Moby Dick*, by Herman Melville (1851),” *ZSR Library*. 3 Dec. 2024. <https://zsr.wfu.edu/2015/moby-dick-by-herman-melville-1851/> 2024年12月2日アクセス。
 - 3 ギルモア (Gilmore) によれば、メルヴィル作品の受けが悪くなった原因として、19世紀中葉のアメリカでは、お涙頂戴式の感傷主義で小説を書き綴る女性流行作家達による作品が売れに売れたため、メルヴィルの影が薄くなってしまったという。Michael T. Gilmore, *American Romanticism and the Marketplace*, U of Chicago P, 1985.
 - 4 ボーレンは、「言葉を尽くしても対象を再現することはできないとする結論を提示し、逆に「イシュマエルはその不可能性を前景化してしまっている」として、図らずもラカン、デリダ、ソシュールと類似した趣旨の発言をしている。Mark Edelman Boren, “What’s Eating Ahab? The Logic of Ingestion and the Performance of Meaning in *Moby-Dick*,” *Style: On Technique—and More—in Fiction*. 34. 1 (Spring 2000), p.3. 現世は劣った神が創造したものとするグノーシス主義 (Gnosticism) の影響を『白鯨』に読み込もうとした代表的文献を参照できるように二点挙げておく。Thomas Vargish, “Gnostic Mythos in *Moby-Dick*,” *PMLA*, 81. 3 (Jun., 1966), pp.272-77. 寺田建比古『神の沈黙——ハーマン・メルヴィルの本質と作品——』筑摩書房、1968。
 - 5 象徴界とは、第三者たる〈父〉の介入により自他の峻別をする必要が生じ、幼児が足を踏み入れる範囲で言語と論理と法を基盤とする範囲。想像界とは、具象的イマージュが幅を利かせる範囲で、幼児が鏡に映った像 (イマージュ) により自我像を認識することに、起源があるとされる。現実界とは、フラッシュバックするトラウマ的経験のように制御不可能なおどろおどろしい事象に満ち溢れ、言語やイマージュでは把握できない混沌とした範囲である。
 - 6 フロイトは、「不気味な (unheimlich)」を意味するドイツ語が、否定の un- と家庭的なの heimlich から構成されていることに注目し、家族、家庭との関係性にあって、抑圧、隠蔽された感覚、つまりエディプス・コンプレックスが、不気味なものとして浮上する、と述べている。ジークムント・フロイト「不気味なもの」『フロイト選集』第7巻、高橋義孝、池田絢一、吉田正己 訳、日本教文社、1970年、p.311。
 - 7 ニュー・アメリカニズムは、『アメリカン・ルネサンス』 (*American*

- Renaissance*, 1941) を出し批評史に於いて金字塔を打ち立てたことで知られるマッシェン (F.O. Matthiessen) あたりを源として始まり、メルヴィル批評ではカーチャー (Karcher)、牧野がその代表格として挙げられよう。Carolyn L. Karcher, *Shadow Over the Promised Land: Slavery, Race, and Violence in Melville's America*, Louisiana State UP, 1980. 牧野有通、『世界を覆う白い幻影』南雲堂、1996。参照。
- 8 ニコラ・フルリー 『現実界に向かって——ジャック＝アラン・ミレール入門』松本卓也 訳、人文書院、2020。原文では「解釈」ではなく「治療」なる用語で説明しているが、文学作品を扱う本稿では便宜上「治療」を「解釈」に置き換えている。
 - 9 Peter Stallybrass and Allon White, *The Politics and Poetics of Transgression*, Cornell University Press, 1986, p.193.
 - 10 João Peneda, “Identity: Intimacy and Extimacy” in *Aesthetics, Art and Intimacy*, eds. Carlos João Correia and Emília Ferreira (Centro Filosofia da Universidade de Lisboa, 2021), p.251. Elizabeth Grosz, *Jacques Lacan: A Feminist Introduction*, Routledge, 1990, p.43.
 - 11 ジャン＝リュック・ナンシー 『無為の共同体 ——哲学を問い直す分有の思考』西谷修、安原伸一郎 訳、以文社、2001年、p.61, p.204。
 - 12 Jonathan A. Cook, *Inscrutable Malice: Theodicy, Eschatology, and the Biblical Sources of Moby-Dick*, Northern Illinois UP, 2012. クックによれば、例えば『『白鯨』に於いてエイハブは、神が最終的にリヴァイアサンを制圧するのを真似て、白鯨に内在する悪を制圧しようとする試みのなかで、神を演じている (In *Moby-Dick*, Ahab “plays God” in his attempt to vanquish the evil he imputes to Moby Dick, in imitation of God’s final conquest of Leviathan (13))』とのことである。一方、白鯨を神そのものと見なす解釈もある。Julian C. Rice, “The Ship as Cosmic Symbol in *Moby Dick* and *Benito Cereno*,” *Centenary Review* 16, 2 (1972), p.144.
 - 13 ファミリー・ロマンスについては、以下の全集に収録されている。「神経症者たちの家族ロマン」『フロイト全集 第9巻 1906 - 1909年—グラディーヴァ論・精神分析について』岩波、2007年。「家族ロマンス」『フロイト著作集 第9巻』人文書院、1983年。
 - 14 Lawrence Thomson, *Melville's Quarrel with God*, Princeton UP, 1952, p.171.
 - 15 “Metaphysical meaning of Ahab (mbd).” *TruthUnity.net*. 24 Dec. 2024.

<https://www.truthunity.net/mbd/ahab>

- 16 ダグラスが指摘するように、アメリカ文化の担い手は中産階級女性となり、特に家庭の主婦が子供達や夫に及ぼす影響はかつてないほど大きくなった。Ann Douglas, *The Feminization of American Culture*, Doubleday, 1977. 参照。
- 17 Laura Barrett, “[T]he ungraspable phantom of life’: Incompletion and Abjection in *Moby-Dick* and *Housekeeping*.” *South Atlantic Review*. 73, 3 (Summer 2008), p.7.
- 18 Boren, *op.cit.*, p.2.
- 19 エリック・H. エリクソン についての代表的な著作として『アイデンティティとライフサイクル』西平直、中島由恵 訳、誠信書房を参照。
- 20 ダイアー (Dyer) も、エイハブとギリシャ神話のナルシスとの共通性を指摘している。Susan K. Dyer, “Narcissism in the Novels of Herman Melville,” *Psychiatric Quarterly*, 65, 1 (1994), pp.15-30. グラバー (Grabher) はさらに一歩踏み込み、拙論と同じくナルシス、エディプス、エイハブなる三者の共通性に着目している。Gudrun M. Grabher, “Adding to the Myths of ‘Moby-Dick’: The Question of Being as Shared by Existential and Oriental Philosophy.” *AAA: Arbeiten aus Anglistik und Amerikanistik*, 14, 2 (1989): pp.168-69.
- 21 Dillingham, William D., *Melville’s Later Novels*, U of Georgia P, 1986, p.79. 工藤昌孝「ユング心理学からみた影——心理療法の実践を通して——」『武庫川女子大学生活美学研究所紀要』23 (2013): p.20, pp.22-23.
- 22 Robert Milder, *Exiled Royalties: Melville and the Life We Imagine*, Oxford, 2006, p.90.
- 23 杉山 崇「臨床心理学における『自己』」『心理学評論』57, 3 (2014): p.439.
- 24 Deborah Paes de Barros, “Call Me Shamu: ‘Moby-Dick’ as Post-Humanist Whale’s Tale,” *American Studies*, 59, 1 (2020), p.64.
- 25 佐藤英明「怪物と私」『中央学院大学人間・自然論叢』51 (2021): p.108. 精神分析に基づく理論的な根拠は示してはいないものの、『白鯨』に即して Francesco Aristide Ancona は、エイハブによるモビー・ディックとの同一化現象には羨望と憎悪が交錯する両感情が確認できると指摘している。Francesco Aristide Ancona, “Hope Sinks: Pandora, Eve and the Obsession of Ahab.” *Journal of Evolutionary Psychology*, 24.1-2 (2003), p.19.

- 26 Thomas Woodson, "Ahab's Greatness: Prometheus as Narcissus." *English Literary History*, 33, 3 (1966), p.362.
- 27 "RTL Words: 'AHAV (Hebrew: אָהָב)." *Bible and Archaeology*. 24 Dec. 2024. <https://bam.sites.uiowa.edu/RTL/ahav>. アクセス 2024 年 12 月 2 日。
- 28 Christopher Sten, *The Weaver God, He Weaves: Melville and the Poetics of the Novel*, The Kent State UP, 1996, p.172.
- 29 Kristen Silva Gruesz, "Feeling for the Fireside: Longfellow, Lynch, and the Topography of Poetic Power," pp.43-63, in Mary Chapman and Glenn Hendler, *Sentimental Men: Masculinity and the Politics of Affect in American Culture*, U of California P, 1999, p.47. Monica M. Elbert, *Encoding the Letter "A": Gender and Authority in Hawthorne's Early Fiction*, Haag+Herchen, 1990, p.18. James R. Mellow, *Nathaniel Hawthorne in His Times*, Johns Hopkins UP, 1980, p.28.
- 30 Brodhead, Richard H. "Trying All Things: An Introduction to *Moby-Dick*." *New Essays on Moby-Dick*, ed. Richard H. Brodhead, Cambridge UP, 1986, p.11.
- 31 中村紘一「〔女性化〕されたトムとキリスト像 ——『アンクル・トムの小屋』について——」『英文学評論』55 (1988): pp. 85-86。なおストウ (Harriet Beecher Stowe, 1811-96) による *Uncle Tom's Cabin* (1852) は、『白鯨』と同時代である。
- 32 矛盾する二つのタスクを同時に履行することが求められ、統合失調症の発症要因となりうるような状況をダブル・バインドという。「愛情」と「敵意」という2種類の情動メッセージが相矛盾する形で発せられる「母子関係」に注目したベイトソンは、これを二重拘束理論として彫琢するに至った。藤本美貴「心的外傷理論としてのダブル・バインドの再構成：—「自己-確証」と「抽象性」をキータームとして—」『立命館産業社会論集』49, 2 (2013): pp.105-6。
- 33 「無意識の中には…反復強迫の支配を認めることができ」「この脅迫は快原理を超え出るほど強く…魔^{デモニッシュ}的な性格を帯びさせる」とフロイトは述べている。『フロイト全集 17』須藤訓任、藤野寛 訳、岩波書店、2006 年、p.32。
- 34 フロイトは『精神分析入門 (続)』(1933) 第 29 講「夢理論の修正」にて、人が苦痛な外傷体験に立ち戻る事実に注目している。中野明德「S. フロイトの夢判断—自己分析が生み出したもの—」『福島大学総合教育研究センター紀要』12 (2012)、p.9

- 35 止揚とは対立する二項をより高次の段階に引き上げ発展的解消を求めるもので、ヘーゲルは『精神現象学』、『大論理学』、『法の哲学』で説明している。
- 36 ホーソーンの放つ魅力にメルヴィルが生涯に渡って呪縛され続けたことは、以下の拙論で論じた。Eitetsu Sasaki, “Probating Melville’s Posthumous Work, *Billy Budd*: Authorship in Self-Imposed Jingoism.” *Intercultural Studies* 36 (2007. 8): pp.145-87. 佐々木英哲「メルヴィルのメタフィクション『ピエール』—偽りのキリスト、ダーク・マザー、ホーソー—」『サイコアナリティカル英文学論叢』31 (2011.3): pp.71-93.

SYNOPSIS

Uncanny Reincarnation and Eternal Return in Melville's *Moby-Dick*

Eitetsu Sasaki

When he published *Moby-Dick; or, The Whale* in 1851, Herman Melville received a harsh blow. The contemporary reading public failed to comprehend the avant-garde nature of the story. In describing the battle between Captain Ahab and the monstrously gigantic white whale called Moby Dick, Melville vividly externalizes the uncanny inner realm of Ahab—a realm that is difficult to allegorize and verbalize. According to Freud, the uncanny becomes tangible when the repressed Oedipal complex resurfaces in consciousness. This paper, therefore, aims to examine how the author confronts, through Ishmael's narration, the two uncanny entities: Captain Ahab and Moby Dick.

Ahab resembles the dictatorial father figure in that he occupies a position where all the men under his command attempt to divine his wishes. He condones their act of cutting the umbilical cord of a cub from its mother, which results in the cub being strangled and killed by that very cord. Curiously, Ahab meets a similar fate: he is strangled by the line of the harpoon he throws at Moby Dick. Ahab mirrors Moby Dick in that both symbolize the tyrannical patriarch, yet he also parallels the cub in the manner of his death. Thus, readers are left perplexed by Ahab's uncanny identity, torn between interpreting him

as a sadistic patriarch or a mere defenseless child.

On a conscious level, Ahab exhibits an irresistible drive to exact revenge on Moby Dick for the loss of his leg. Unconsciously, however, he simultaneously conceals a desire to merge with the gigantic whale, an embodiment of masculinity. This desire for extravagantly showy masculinity is denied by Ishmael, who, in contrast, embraces the discipline of motherhood and womanhood, placing his hope in the sustainability of life. Melville, it seems, aligns himself with Ishmael's perspective and seeks his Ideal Ego in the image of Ishmael.

If Moby Dick's whiteness is perceived as beautiful, it evokes comparisons to Melville's contemporary, Nathaniel Hawthorne, the literary virtuoso of the day, whose androgynous beauty can be likened to that of Moby Dick, the king of the sea.

Throughout his life, Melville seems to have sought his Ego Ideal in the image of Hawthorne. In this way, Melville transforms himself into an embodiment of the uncanny.

The Wild Palms—If I Forgot Thee, Jerusalem— における2つの物語の関係性

有 働 牧 子

ウィリアム・フォークナー (William Faulkner, 1897-1962) の『野生の棕櫚』 (*The Wild Palms—If I Forgot Thee, Jerusalem—*, 1939) という長編小説は、「野生の棕櫚」 (“The Wild Palms”) と「オールド・マン」 (“Old Man”) という二つの物語が交互に展開する、二重小説といわれる作品である。二つの独立した物語が一章ずつ交互に展開され、最後まで交わることなく続く。しかし、フォークナー自身次のように述べていることからわかるように、これらは、お互いがお互いを高め合うように存在し、相乗効果を高めた作品となっている。

I did not know it would be two separate stories until after I had started the book. When I reached the end of what is now the first section of *The Wild Palms*, I realized suddenly that something was missing, it needed emphasis, something to lift it like counterpoint in music. So I wrote on the “Old Man” story until “The Wild Palms” story rose back to pitch.¹

そこで本稿では、通底するテーマを探るためにふさわしい精神分析を用いて、この二つの物語の関連性を明らかにしたい。

まず、二つの物語の共通点として指摘できるのは、主人公がいずれも三角関係の中にあるということである。その三角関係は、エディプス期の三

角関係と重なるものでもある。

フロイトのエディプス・コンプレックスについて、その構図を改めて確認すると、エディプス・コンプレックスは「少年が母を愛しつつ、彼がライバルとみなす父を憎悪すること」である。つまり、エディプス期の少年は母を愛するが故に父を憎むのであり、少年と母、少年と父という、一対一の関係が二つ同時にあるのではなく、あくまでも三角関係なのである。エディプス期の三角関係は、少年の願望だけを起点とするものではない。例えば、スパイロという文化人類学者は、『母系社会のエディプス』という本の中で、エディプス神話が父親の「この子を殺せ」という命令から始まっていることや、フロイトの後に出てきた様々な分野の研究者もまた同様の指摘をしていることを挙げながら、次のように書いている。

・・・両親がエディプス・コンプレックスをつくり出すのにしばしば中心的な役割を演ずるということをここで強調しておこう。たとえば母は子に対してしばしば「誘惑的」で、そこから母に対する子の性的感情が生じ、実際の誘惑の空想へと彼を導いてゆく。同様に、父はしばしば息子を妻の愛をめぐるライバルとみなし、それに由来する彼の息子への敵意の表現によって、息子の方に恐怖と憎悪が生ずる。・・・もし少女が父に対する近親相姦願望について欲求不満を抱いたままであれば、彼女は母になったとき、父の位置に息子を置き、・・・彼にますます「誘惑的」に振舞うかもしれないからである。同様に、もし少年が母を独占できないという欲求不満をもっているならば、彼は夫として妻を彼女の位置に置き、・・・彼のライバルとみなす息子にますます攻撃的に振舞うかもしれない。²

エディプス期の崩壊は、子供の願望の充足ではなく挫折によって訪れ、その後抑圧されて潜伏期に移行する。この抑圧ということ、そしてその願望

の強さや挫折の経験のインパクトを考えれば、確かに、エディプス三角形の成立が少年の願望だけに由来するものではなく、両親が果たす役割もまた小さくはないであろう。このことに関連して、精神科医の中井久夫は、『つながりの精神病理』という著書の中で次のように書いている。

人間と人間とのつながりは、常識が考えるよりもはるかに複雑で奥行きと広がりがあり、また生ぐさいものである。

私は多少ウェットな感じの「つながり」という言葉を中世的な「相互作用」といいかえたい。人間関係は必ずしも連携ではない。³

『野生の棕櫚』における二つの物語においても、その三角関係は主人公らの願望からのみ始まったものではなかった。まず、「野生の棕櫚」における三角関係は、ハリー・ウィルボーンとシャーロット、そして彼女の夫であるフランシス・リトンメイヤーから成っている。エディプス期の三角形に照らし合わせるならば、少年の位置にいるのがウィルボーン、母の位置にシャーロット、そして父の位置にフランシス、とすることができる。ここにフランシスが存在し続けるのは、彼がシャーロットとの離婚を承諾することはなく、婚姻関係だけはずっと続いていたからである。その上シャーロットは、ウィルボーンと暮らすために家を出る時、いつか家に戻るための旅費をフランシスから持たされていた。ついに最後まで二人の間に立ちほだかっていたフランシスの顔は、作品の中で、息子をライバルとみなし、攻撃的に振舞うエディプス期の父を思わせる描き方がされている。

...the face calm outrageous and consistant, the man who had been right always and found no peace in it.⁴

さらに、シャーロットと生活する中でウィルボーンが警戒していたのは、

「亭主になること」だった。

“I had turned into a husband,” he said. “That was all. I didn’t even know it until she told me the store had offered to keep her on. At first I used to have to watch myself, rehearse myself each time so I would be sure to say ‘my wife’ or ‘Mrs Wilbourne’, then I discovered I had been watching myself for months to keep from saying it; I have been caught myself twice since we came back from the lake thinking ‘I want my wife to have the best’ exactly like any husband. . . .”⁵

このようにウィルボーン (Harry Wilbourne) は、世間体ないしはリトンメイヤー (Francis Rittenmeyer) に反発しながら、シャーロット (Charlotte Rittenmeyer) との関係を模索していたのである。

一方で、シャーロットとの関係に目を向けてみても、やはり状況は同じだった。ウィルボーンは彼女との関係を決して自ら主体的に始めたわけではなかった。男女の経験が全くと言っていいほどなく、自ら「恋を拒否している」とまで言っていたウィルボーンを、シャーロットは、夫と子供がいる身でありながら誘惑する。パーティーで初めて会ったとき、彼女の方から彼に話しかけ、次々に個人的な話をするのである。そして彼を誘い出し、二人はデートを重ねるようになる。こうしてその気にさせられたウィルボーンは、自分の将来を投げ打って、彼女との道を選ぶ。二人で生活するようになってしばらく経った後に、ウィルボーンは彼女のことを冷静に見つめながら次のように独白している。

Why, she’s alone. Not lonely, alone. She had a father and then four brothers exactly like him and then she married a man

exactly like the four brothers and so she probably never even had a room of her own in all her life and so she has lived all her life in complete solitude and she doesn't even know it as a child who has never tasted cake doesn't know what cake is. ⁶

つまり、ウィルボーンには、シャーロットが父親との関係を発端として男たちに対する欲求不満を繰り返してきたこと、そして、その不満を無意識的に埋めようとして自分に近寄ってきたことがわかっていたのである。他にも、ウィルボーンは彼女について“*That there is something in me she is not mistress to but mother...*”⁷という発言をしている。さらに、彼女とともに過ごしてしばらく経ったところに、彼は次のように悟るのである。

Yes he thought. It's the Indian summer that did it. I have been seduced to an imbecile's paradise by an old whore; I have been throttled and sapped of strength and volition by the old weary Lilith of the year. ⁸

次に、「オールド・マン」の中で「背の高い囚人」と表記される男が陥った三角関係について見ていきたい。ここで描かれる三角形を構成しているのは、囚人、女とその胎児、オールド・マン（ミシシッピ河）の三つである。ウィルボーンのときのように、この位置には女が身ごもっている子供の父親が置かれるのが普通かもしれないが、直接的にも間接的にも、その父親が作中で描かれることはない。その代わりにこの象徴的な「河」が登場しているのである。物語の中でまず印象づけられるのは、オールド・マンが、別世界から突如として出現し、氾濫して囚人や女をはじめとした多くの人々を苦しめているのではなく、これまでの7年間、彼が安全な刑務所にいる間も、実はずっとすぐ近くにあったものだという事である。

救出作業のために荒れ狂うオールド・マンに向かう道中、その河を初めて目の当たりにした囚人は次のように描写されている。

...for the first time he looked at the River within whose shadow he had spent the last seven years of his life but had never seen before...⁹ (下線筆者)

下線部の通り、頭文字が大文字で表記されていることから、この河の象徴性が窺い知れる。そして囚人は「これまでずっとその河が落とす影のもとで暮らしていた」という描写も印象的である。こうした描写は、エディプス期を経て超自我として取り込まれた「父」と重なるものであり、このような河の氾濫は、その父が再び猛威をふるい、彼を攻撃し始めたと解釈できる。

先に述べたように、この囚人は、どさくさに紛れて自由になることは十分可能だったのに、刑務所へ戻ることを終始考えていた。もし彼が本当に望めば、それなりに早い段階で刑務所にたどり着くこともできたはずである。しかし彼がそうできなかったのは、氾濫するオールド・マンに阻まれたことに加えて、出会ったときすでに臨月を迎えていた女の存在があったからである。この女が具体的に彼を誘惑したり、執拗に助けを求めたりすることはない。その代わりに象徴的な描写がある。女が突然産気づき、彼はお産を手伝おうと奮闘する。そのとき、彼の足元に、創世記でアダムとイブをそそのかした蛇が不気味に出現するのである。そして、産まれたばかりの赤ん坊を見つめながら、彼は次のように独白する。

And this is all. This is what severed me violently from all I ever knew and did not wish to leave and cast me upon a medium I was born to fear, to fetch up at last in a place I never saw before

*and where I do not even know where I am.*¹⁰

こうして、囚人は、度重なるオールド・マンの攻撃に遭いながら、女と子どもを必死になって守らなければならない羽目になったのである。

ここで、エディプス・コンプレックスの名前の由来となった、エディプス神話の結末を思い出してみたい。この神話の中で、父親を殺して母を我がものとしたエディプスは、真相を知らされ、その手で自らの眼をえぐる。

このような自己処罰の道を囚人もまた辿る。彼は、女が出産した後、放浪の途中でたまたま出会った男にワニ猟を教わり、それで収入も得るようになるが、自由に生きることの喜びを感じはじめる反面、これは自分の選んだものではないと考えるのである。

. . . though his life had been cast here, circumscribed by this environment, accepted by this environment and accepting it in turn (and he had done well here—this quietly, soberly indeed, if he had been able to phrase it, think it instead of merely knowing it—better than he had ever done, who had not even known until now how good work, making money, could be) yet it was not his life, he still and would ever be no more than the water bug upon the surface of the pond, the plumbless and lurking depths of which he would never know, his only actual contact with it being the instants when on lonely and glaring mudspits under the pitiless sun. . . .¹¹

そして、そのような中、彼はまたしても攻撃を受ける。今度の攻撃は、自然の河だけではなく人間の手も加わった、災害対策の一環としての堤防爆破だった。これを知った囚人は次のように考える。

...that now the cosmic joker, foiled twice, had stooped in its vindictive concentration to the employing of dynamite.¹²

こうして彼は、辿り着いた町で自ら名乗り出るかたちで、当初からの望み通りに女や子どもと別れて刑務所に戻る。

ウィルボーンもまた、最終的にはシャーロットと離れ離れになる。元々研修医だった彼は、彼との子どもを妊娠したシャーロットから執拗に墮胎手術を迫られ、散々拒絶したあげくにやむなく執刀する。しかしそれは失敗に終わり、そのことが原因でシャーロットは体調を崩し、亡くなる。このきわめて残酷な墮胎手術へ至る道は、先に引用したように、シャーロットが安定した仕事に就くことをウィルボーンが拒んだことから始まった。というのは、その後、ある別の仕事を頼って二人はユタ州の鉱山に赴くのであるが、そこで出会った夫婦から墮胎手術を依頼され、その時には成功していたのである。シャーロットはこのことに安心材料を得て、ウィルボーンに手術を迫っていたのである。

この結末は、囚人の場合と違って、一見するとウィルボーンの自己処罰であるようには見えない。しかし、シャーロットが亡くなったのは元はといえばウィルボーンが世間体を拒んだ代償であり、亡くなった胎児はウィルボーン自身の子供であり分身にほかならず、やはり、自分で自分を処罰したエディプスと同じだと言える。

こうして、最終的には囚人とウィルボーンの両方が、エディプス期が崩壊した時と同じように、母の位置にある女性たちとの別れを余儀なくされた。しかしながら、その別れに対して彼らが取った態度は対照的なものであった。

まず囚人の場合であるが、刑務所に戻った彼は、それまでの出来事を他の囚人らに話して聞かせながら、かつて自分が起こした列車強盗未遂事件

もまた、当時の恋人にそそのかされてのことだった、ということに思い当たる。そして、そのような過去を否定し、自らの敗北感を覆い隠すかのように、自分を誘惑した女たちに対して““Women, shit,” the tall convict said.”¹³ と、罵りの言葉を吐く。

一方でウィルボーンは、逮捕された後面会に来たフランシスからひそかに青酸カリを手渡され、自殺を迫られるが、それを断固として拒絶し、その理由を次のように独白する。

*Because if memory exists outside of the fresh it wont be memory because it wont know what it remembers so when she became not then half of memory became not and if I become not then all of remembering will cease to be. –Yes he thought Between grief and nothing I will take grief.*¹⁴

喪失に直面したウィルボーンの様子は、喪失から目を背け、繋がりを断ち切った囚人とは対照的である。彼は喪失という「悲しみ」に向きあおうとするのである。その姿は非常に自己心理療法的なものだと言える。というのは、精神分析が扱う神経症の症候は、欲求が阻止され、それでも何とか満足を見出そうとする行為の結果現れる現象だからである。一見満足からは程遠いものであっても、どんなに不可解でも、向きあい、解釈することでしか埋められない「穴」があることを、精神分析は発見した。こうした症候について、フロイトは次のように述べている。

症候を奇妙なものに感じさせたり、それがリビドー満足の手段であるとは不可解だと思わせたりするものには、もっと別のものがあります。症候を見てもわれわれは、正常な状態ではいつもそこから満足を期待できるようなものを、必ずしもすべて想起したりはしませ

ん。たいていのばあい、症候は対象を無視し、ひいては外界の現実との関係を放棄しています。われわれはこの事実を、現実原則から転じて快感原則に立ち戻る結果であると理解しています。しかしそれは同時にまた、性衝動に最初の満足を与える一種の拡大された自体愛 (Auto-erotismus) への立戻りでもあります。症候は外界を変化させる代りに自分の身体を変化させる、つまり外的な行動を起す代りに内的な行動をし、行為の代りに適応 (Anpassing) をするわけですが、これはまた、系統発生的に見て、きわめて有意義な退行現象と対応しています。¹⁵

ウィルボーンはシャーロットを失った後で自らの「肉体」に意識を向けるようになり、同時に記憶作用という「内的な行動」にめざめた。彼自身「悲しみを選ぶ」と表現しているように、一見するととても孤独で満足など得られないようにみえるその態度は、精神分析的に言えば、現実原則というままならないものに振り回されて生きなければならない人間にただ一つだけ残された対応可能な選択肢なのである。

フォークナーが最初にこの小説の原稿に付したタイトルは、「野生の棕櫚」ではなく「エルサレムよ、もしも私がおまえを忘れたら」というものだった。この言葉は、旧約聖書の「詩篇」第 137 章からとられており、囚われの信者たちが遠く離れたエルサレムを想って発した言葉である。

137 By the rivers of Babylon, there we sat down, yea, we wept,
when we remembered Zion.

...

5 If I forget thee, O Jerusalem, let my right hand forget her cunning.

6 If I do not remember thee, let my tongue cleave to the roof of

my mouth; if I prefer not Jerusalem above my chief joy.

結局、二つある物語の一方のタイトルをとって *The Wild Palms* として出版されたが、この当初のタイトルは、ウィルボーンが亡きシャーロットに思いを馳せながら最後に発する “*Between grief and nothing, I will take grief*” という言葉とも呼応している。

フロイトは、「個人は二重の存在をいとなんでいる」として、その二つの層をなしているのは、自己の意志と、生物学的な意味での肉体であると書いている。

個人は現実的には二重の存在をいとなんでいるのであって、自己目的であると同時に鎖の一環でもあり、この鎖のために自己の意思に反し、またはともかく自己の意思をもたずに奉仕している。個人では自分では性愛を自己の意図の一つであると考えているが、見方を変えれば、個人は自己の遺伝形質の付属物であるにすぎず、このものために自分の力を快樂につられて捧げているのであり、ある——おそらくは——不滅の実体を担っている死すべき者であって、ちょうど家督相続人が自分よりも長持ちのする世襲財産を一時的に所有しているようなものなのである。¹⁶

自己の意志は精神的なもので、不滅であり直線的である。たいして肉体は、ひとつ残らず死すべき運命にあり、生まれれば閉じる。一方で、その途中で枝分かれした別のものが同じように始まり閉じる。これを連綿と繰り返していく円環的なものである。私たち個人、ないしは、そのような私たちが生きるこの世界は、不滅か有限か、または直線か円環かで単純に結論付けられるものではなく、それらがまじりあい、複雑に絡み合って成り立っている。

ウィルボーンは「悲しみを選ぶ」と言って、それまではあまり感じられなかった自己の意志をはっきりと表明した。ハリー・ウィルボーン、すなわち「ウィル=意思」が「ボーン=生まれる」という名前に象徴されるように、シャーロットを失うことで初めて彼は確固たる意志を持つようになり、個人として本当の意味で生まれたと言える。人がエディプス期を経て経験する大きな喪失とは、エディプス王の自己処罰に象徴されるように、エディプス期以前に享受していた自己愛の喪失である。この自己愛はそもそも、母親と子供だけの、何ものにも侵されることのない二者関係の中で生まれる。というのは、ラカンによる「鏡像段階」の理論の中でも説明されているが、鏡に映る自分の姿を見つめる子供は、その鏡像の背後にある母親の承認の眼差しに後押しされて初めて、自己愛に浸ることができるからだ。しかし同時に、このような状態は、子供の存在の無を意味してもいる。つまり、この時子供は、もはや自分自身ではないほど完全に、ひとつの幻想であるその鏡像に自己を埋没させてしまうのである。

自分の意志で悲しみを選んだウィルボーンの前には、果てしない道が続いていることだろう。しかしながら、彼は勇気をもってその道に踏み出した。そのことは、彼が、悲劇の中にあって有限の肉体をも同時に意識することで、個人として確実に立ち上がったことを意味している。フォークナーは、1950年にノーベル賞授賞式で次のように演説している。

I decline to accept the end of man. It is easy enough to say that man is immortal simply because he will endure: that when the last ding-dong of doom has clanged and faded from the last worthless rock hanging tideless in the last red and dying evening, that even then there will still be one more sound: that of his puny inexhaustible voice, still talking. I refuse to accept this. I believe that man will not merely endure: he will prevail.¹⁷

精神と肉体、または不滅と有限が絡み合う世界の複雑さを前に、覚悟をもって歩みだしたウィルボーンもまた、その魂のうちにシャーロットへの愛を生涯抱き続け、たとえその肉体が生きながらえている間にではなくても、いつかきっと勝利をおさめる。そのことを願い、対比させて強調するために、フォークナーはこの“二重小説”を描いたのではないだろうか。

Notes

- 1 Faulkner, William. *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner 1926-1962*. Ed. James B. Meriwether and Michael Millgate. New York: Random House, 1968. pp. 247-248.
- 2 スパイロ、メルフォード・E 『母系社会のエディプス—フロイト理論は普遍的か—』 井上兼行訳（紀伊国屋書店、1990年）pp. 21-22.
- 3 中井久夫 『「つながり」の精神病理』（ちくま学芸文庫、2011年）p. 135.
- 4 Faulkner, William. *The Wild Palms*. New York: Vintage Books. 1995. p. 271.
- 5 *Ibid.*, p. 112.
- 6 *Ibid.*, p. 70.
- 7 *Ibid.*, pp. 119-120.
- 8 *Ibid.*, p. 97.
- 9 *Ibid.*, p. 62.
- 10 *Ibid.*, p. 194.
- 11 *Ibid.*, pp. 222-223.
- 12 *Ibid.*, p. 221.
- 13 *Ibid.*, p. 287.
- 14 *Ibid.*, p. 273.
- 15 フロイト、ジークムント 『フロイト選集2 精神分析入門（下）』 井村恒郎、馬場謙一訳（日本教文社、1970年）pp. 196-197.
- 16 フロイト、ジークムント 『フロイト著作集6 自我論・不安本能論』 井村恒郎、小此木啓吾、他訳（人文書院、1970年）p. 113.
- 17 Faulkner, William. *Essays Speeches & Public Letters*. CHATTO AND WINDUS LTD. 1967. p. 120

SYNOPSIS

The Connection of the Two Stories in *The Wild Palms [If I Forgot Thee, Jerusalem]*

Makiko Udo

William Faulkner's *The Wild Palms [If I Forgot Thee, Jerusalem]* consists of two stories, "The Wild Palms" and "Old Man." Apparently, these two stories have nothing to do with each other, but surely there must be a common theme that binds them together. Applying the theory established by Freud, I compare the lives of the two protagonists, Harry Wilbourne in "The Wild Palms" and "the taller convict" in "Old Man," to clarify the connection of the two stories and what Faulkner attempted to highlight in this whole work.

執筆者紹介

学術論文

(アメリカ文学)

佐々木英哲 桃山学院大学 国際教養学部 教授
サイコアナリティカル英文学会 常任理事・理事・運営委員・編集委員

有働 牧子 熊本県立大学 非常勤講師
サイコアナリティカル英文学会 事務局長・理事・運営委員

サイコアナリティカル英文学協会

[1974(昭和49)年7月20日創立]

サイコアナリティカル英文学会

[1983(昭和58)年4月1日改称]

初代名誉会長 大槻 憲二

第2代名誉会長 (初代会長) 今田 準造 (創立者)

1. サイコアナリティカル英文学会

〒752-0997 山口県下関市前田2丁目27-43

会 長：小園 敏幸 TEL 090-8297-0729

E-mail: kozonotoshiyuki2@gmail.com

事務局長：有働 牧子 TEL 080-1733-1554

E-mail: udou@pu-kumamoto.ac.jp

ホームページ：psell.sakura.ne.jp

2. 役員 [任期3年：2023年(令和5)年4月1日～2026年(令和8)年3月31日]

顧 問：倉橋 淑子

会 長：小園 敏幸

副 会 長：湯谷 和女、横田 和憲

常任理事：石田美佐江、小園 敏幸、佐々木英哲、鈴木 孝、

関谷 武史、湯谷 和女、横田 和憲

理 事：石田美佐江、有働 牧子、上滝 圭介、小園 敏幸、

佐々木英哲、鈴木 孝、関谷 武史、藤見 直子、

松山 博樹、湯谷 和女、横田 和憲

会計監査：藤見 直子、松尾かな子

運営委員：有吉登志子、石田美佐江、有働 牧子、上滝 圭介、

佐々木英哲、中尾香代子、松尾かな子、森岡 稔

編集委員：飯田啓治朗、倉橋 淑子、小園 敏幸 (編集長)、

佐々木英哲、James Summers、松山 博樹

事務局長：有働 牧子

【付記】

「名誉会長」および「顧問」は、常任理事会および理事会を欠席する場合には、事前に、会長宛に文書あるいは電話で意見を述べる。会長はその主旨を常任理事会および理事会で報告し、必要に応じて議題とする。また、上記の会は「名誉会長」および「顧問」に助言を求めることができる。

サイコアナリティカル英文学会会則

第1節 総 則

第1条 本会は、サイコアナリティカル英文学会という。

第2条 本会は、本部を会長の本務校又は自宅に置く。
事務局については、別途理事会において決定する。

第2節 目的と事業

第3条 本会は、精神分析学の立場から、英米の言語及び文学を研究することを目的とする。

第4条 本会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

1. 学術研究会、講演会
2. 会誌の発行
3. その他、本会の目的を達成するために必要な事業

第3節 会 員

第5条 本会の会員は、次の通りとする。

1. 本邦大学課程またはそれに準ずる教育を受けた者及び相当教育機関の在籍者で、本会の目的に賛同する者を会員とする。会員は維持会員および一般会員で構成する。維持会員は会員の中の有志とする。
2. 本会に功績のあった者で会長が役員会に諮って推挙する者を名誉会員または賛助会員とする。

第6条 本会に入会を希望する者は、所定の申込書を事務局に提出し、理事会の承認を得なければならない。

第7条 会員は、本会の開催する学術研究会において研究発表をすることができる。

第8条 会員は所定の会費を納入しなければならない。

名誉会員は会費を納入することを要しない。

第9条 年会費は維持会員1万円（内、3,000円は寄付）、一般会員7,000円。

但し、大学院生は3,500円とする。

第10条 退会を希望する者は、退会願いを事務局に提出し、理事会の承認を得なければならない。

第4節 運 営

第11条 本会には役員として会長1名、副会長2名、会計監査2名、常任理事、理事及び運営委員、論叢編集委員若干名を置く。

尚、名誉会長及び顧問を置くことができる。

第12条 （理事） 理事は会員の推挙により選出する。

第13条 （常任理事） 常任理事は理事の中から推挙により選出する。

第14条 （会長） 会長は常任理事の中から推挙により選出する。

第15条 （副会長） 副会長は会長が常任理事の中から選任する。

第16条 （運営委員） 運営委員は会員の中から推挙により選出する。

第17条 （会計監査） 会計監査は会員の中から推挙により選出する。

但し、2名のうち少なくとも1名は理事を兼ねることができない。

第18条 （『論叢』編集委員） 『論叢』編集委員は会員の中から推挙により選出する。

第19条 （役員会） 会長は必要に応じ役員会を招集する。

第20条 （理事会） 会長は原則として年1回理事会を招集する。

会長は前項理事会に必要な応じ運営委員の出席を求めることができる。

第21条 （常任理事会） 会長は随時常任理事会を招集することができ

る。

会長は前項常任理事会に必要なに応じ運営委員の出席を求めることができる。

常任理事会の決議事項は理事会の議を経て効力を発するものとする。

第22条 役員任期は3年とし、重任を妨げない。

第23条 本会の経費は年会費、寄付金その他を以て賄う。

第24条 本会は年1回総会を開き、役員決定、年会費決定、事務会計の報告等を行う。総会に続いて、学術研究会を開催し、会員の研究業績の発表及び討議を行う。

第25条 本会則の変更は、理事会の審議を経て総会に提出され、総会出席者の3分の2以上の賛成を得なければならない。

補則 本会則は昭和49年7月20日より施行する。

昭和49年12月1日 第1回大会 改正

昭和51年12月5日 第3回大会 改正

昭和52年12月4日 第4回大会 改正

昭和53年12月3日 第5回大会 改正

昭和54年12月1日 第6回大会 改正

昭和55年12月6日 第7回大会 改正

昭和57年12月4日 第9回大会 改正

平成3年11月9日 第18回大会 改正

平成8年10月19日 第23回大会 改正

平成9年10月4日 第24回大会 改正

平成12年9月30日 第27回大会 改正

平成14年10月5日 第29回大会 改正

平成16年10月5日 第31回大会 改正

平成23年10月22日 第38回大会 改正

平成27年10月3日 第42回大会 改正

付記

この規程の他に、名誉会長・顧問・名誉会員に関する内規を別に定める。

『サイコアナリティカル英文学論叢』 投 稿 規 程

1. 投稿論文は未発表のものであること。但し、口頭発表はその旨を明記すれば可。
2. 内容は精神分析学の立場から、英米の言語及び文学を研究した論文であること。
3. 応募者は本学会会員であること。
4. 原稿（「論文および 200 語程度の英文シノプシス」、「書評（英文シノプシスは不要）」）は全て、パーソナルコンピューターによること。審査用として、編集長のメールアドレスに原稿を添付ファイルにて送信すること。
（現編集長は小園敏幸, E-mail: kozonotoshiyuki2@gmail.com）
5. 原稿の採否および掲載の時期は編集委員会が決定する。
6. 採用論文の執筆者は論叢印刷費用の一部を負担すること。詳細は内規による。
7. 原稿の締め切りは 12 月 10 日とする（厳守のこと）。
8. 『論叢』発行の際に、執筆者には「抜刷 30 部と『論叢』5 部」が送られる。但し、ゆうパックの送料は、着払いとする。

論文の書き方の大枠については、次の通りである。

- (1) 本文の後には、Notes の項目のみ設ける。Bibliography や Works Cited の項目は設けない。
- (2) 「注（註）」は Notes とする。
- (3) 短い引用文（Two sentences 以下）の場合は、Double quotation marks（“ ”）でくくって、地の文の中に入れる。その出典が地の文の中に明示されていない場合には、closing mark（”）の

右上肩に番号を打って、Notes の中で出典を明示する。

- (4) 長い引用文は、地の文と区別し、indent し、この quotation と地の文との space は double space とする。
- (5) Notes には、次の略語を使用する。
ibid. 同一著者の同一著作に連続して言及する時に用いる。
op. cit. 著者 (surname) と page number は必ず示す。
loc. cit. 同一著書の同一頁から連続して引用する場合にのみ用いる。
- (6) シノプシスには英文のタイトルとローマ字による執筆者の氏名を記入すること。

Notes の具体例は、次の 1-12 を参考にしてください。

Notes

1. Sherwood Anderson, *Poor White* (New York: B. W. Huebsch, 1920), p. 12.
 以下、同書からの引用は全てページ数を括弧に入れて本文中に記す。
2. William James, *The Principles of Psychology* (New York: Henry Holt, 1890), p. 190.
3. *Loc. cit.*
4. *Ibid.*, p. 58.
5. Irving Howe, *Sherwood Anderson: A Biographical and Critical Study* (California: Stanford University Press, 1966), p. 124.
6. James, *op. cit.*, pp. 56-8. 参照。
7. Trigrant Burrow, *A Search for Man's Sanity* (New York: Oxford University Press, 1985), p. 561.
8. James, *op. cit.*, p. 205.

9. Howe, *op. cit.*, pp. 250-62. 参照。
10. *Ibid.*, p. 38.
11. Burrow, *op. cit.*, p. 320.
12. 村上 仁『異常心理学』（東京：岩波書店、1952）、pp. 56-7. 参照。

（但し、論文で扱う、所謂 Text に相当するものについては、例えば上記の Notes 1. のように「以下、同書からの引用は全てページ数を括弧に入れて本文中に記す」としても可。但し、その場合、例えば 15 ページであれば、(15) ではなく (p. 15) と表記すること。

あるいは、Text であっても他の引用と同様の表記の仕方でも可。）

付記

学会の依頼による執筆の場合は、この規程を適用しない。

この規程の他に、『サイコアナリティカル英文学論叢』に関する内規を別に定める。

サイコアナリティカル英文学会の 図書出版に関する規程

本学会は「著作が精神分析学の立場から英米の言語や文学を研究している」場合に、執筆者の申し出により可能な限りのサポートをする。(執筆者は本学会会員であること。)

1. 編集委員が著作の査読を行い、必要に応じて助言し、著作内容の一層の充実のために協力する。
2. 印刷会社については原則として執筆者が直接交渉するものとするが要望があれば、紹介等の便宜をはかる。
3. 完成本については、学会に献本するものとする。

編集後記

会長・編集長 小園敏幸

サイコアナリティカル英文学会は、精神分析学の立場から、英米の言語及び文学を研究することを目的として、1974（昭和49）年7月20日に創設され、この3月20日で創立50周年と8ヶ月を迎えます。本学会の機関誌は、創立当初は会員向けに『セル』（PSELL: The Society for Psychoanalytical Study of English Language and Literature）というnews letterを発行していましたが、その数年後から、現在の『サイコアナリティカル英文学論叢』に形を変えて、日本の有数の大学・短大の附属図書館、新聞社、英米の有数の大学附属図書館、英米文学関係者等に寄贈しております。

精神分析はSigmund Freud（1856-1939）によって創始された学問であり、今日では心理学、医学、教育学ばかりでなく、文学、芸術、宗教、司法、政治、その他あらゆる方面の研究分野において応用されていることは周知の通りです。

文学批評の方法としては、美学的批評、倫理的批評、社会学的批評、精神分析学的批評、心理学的批評、原型批評、新批評等が挙げられますが、これらの何れの批評方法を駆使しても文学作品が内包する意味の多元性を遺憾無く探究することは不可能です。その何れの方法も一面的解釈に過ぎないからです。精神分析学的批評もこの例外ではなく、他の批評方法と同様、そこには自ずと限界があります。しかしながら、精神分析学的理論を援用して考察することが科学的かつ有効な文学研究方法であることもまた事実です。

『サイコアナリティカル英文学論叢』は、「年1回の定期刊行物」です。

今年度（2024〈令和6〉年度）は第45号ですが、実は林暁雄先生が逝去されたため追悼号となります。

林暁雄先生は本学会の発起人の中のお一人です。林先生のご専門は外国貿易実務英文通信ですから、英米文学とは少し趣を異にしているため、先生ご自身が本学会において研究発表をしたいと言う願望はなかったと私は思っています。林先生は、この学会が「精神分析学の立場から、英米の言語及び文学を研究することを目的としている」と、十分に理解されているが故に、常任理事会・理事会・大会において常に大所高所から判断し、その場その場で籐を緩めることなく、ご自身のその時々々の役員、即ち顧問・副会長・編集委員兼査読委員・事務局担当者として、学会の目的・発展のために軌道修正を真摯な態度で積極的に推し進めてこられました。思い起こせば、林先生と私は『論叢』の編集委員兼査読委員を長年に亘って担当しましたが、「この投稿論文は、この部分をどうして精神分析をしていないのか、理解できない・・・」などと林先生はしばしば苦言を呈しておりました。これについては、期せずして私も同意をしたものです。これは取りも直さず、今田準造先生の英米文学の精神分析的考察の教えを受けた先輩後輩の関係であったからでしょう。林先生は、今頃、あの世で、奥様の広子様とコーヒーを飲みながら、本学会のことを語り合っておられるかもしれません。ひょっとしたら、多分、今田準造先生も一緒に紅茶を飲んでおられると思います。

話が前後しますが、私にとって非常に大事な畏友・小城義也先生が2024（令和6）年2月6日に逝去されました。享年77です。

小城義也先生の奥様から4月13日付のお手紙を拝受いたしました。一瞬、目を疑いました。何度も読み返しました。涙が止まらず、「嘘だ、嘘だ」と心で叫んでいたが、やがて小声で「嘘だ、そんな筈はない」と呟いて、気がつくとき書斎で呆然としておりました。

奥様のお手紙より抜粋させていただきます。

「・・・今日は小園先生に悲しいお知らせをしなければならず、ご連絡が大変遅くなりました事、どうぞお許し下さい。1年2ヶ月に渡り闘病生活を続けてきました主人ですが、今年に入り体調が悪くなり、緩和ケアの病院に1月29日に入院し、9日目の2月6日の早朝にあの世へと旅立ってまいりました。最期は本当に穏やかな表情で、残された私達にとってその事が何よりの救いでした。生前最後の痛みへの不安を幾度となく言っていたので、本当に有り難かったです。通夜、葬儀は本人の希望で家族と親戚のみで行いました。友人・知人・職場関係の方々等どなたにもお知らせしておりません。・・・」

小城義也先生のご専門は中世英語で、特に William Shakespeare の作品については全てを読破していて、普段の小城先生との談笑や二人でお酒を飲んでいる時などに、シェイクスピアが度々登場しました。日本の歴史・文化についても博学多才な先生でした。愚息も、私も、小城義也先生に対して心から敬愛の念を抱いておりました。

私が熊本県立大学に勤務していた頃、運動不足を心配して、小城先生と一緒に運動公園を何周か回ったり、時には温泉に入り、その後ビールを飲みながら文学青年の真似事をしてみたり、談笑したことが思い出されます。

実は、小城義也先生が亡くなられ、林暁雄先生も亡くなられたため、『論叢』第45号を逝去されたお二人の追悼号とすることが常任理事会で決定しました。ところが、小城義也先生の奥様から「主人の専門は中世英語であって、精神分析的考察は、未熟であり、専門ではないので、追悼号については辞退したい」と言う丁寧なお手紙をいただきました。非常に残念ですが、小城義也先生を外すことに決定します。故に、『論叢』第45

号は、林曉雄先生の追悼号とさせていただきます。

小城義也先生には研究発表の司会や投稿論文の査読で大変お世話になりました。そして、第34回2007（平成19）年度大会は、小城義也先生の本務校である熊本学園大学で開催されました。九州での開催は、それが3回目（1回目は熊本県立大学、2回目は北九州市立大学）で、大会当日は好天候にも恵まれ、参加者も非常に多く、開催校責任者の小城先生も非常にお元気で早朝から多忙を極め、動き回っておられました。本当に素晴らしい大会であったことが、まるで1、2年前の出来事であったように思えてなりません。

私の最も信頼にしていた小城義也先生と林曉雄先生のお二人が私を残して、あの世へと旅立ってしまわれました。これまでのお二人の行跡と業績・功績を顧みると、この学会にとりまして大きな損失であることは間違いありません。如何なる因果か、この悲しみに耐えなければならないことは重々承知しているが、この世の残酷な仕打ちに、私は、これこそ神様による私への試練であると思わざるを得ません。本学会の初代名誉会長・大槻憲二先生、初代会長・今田準造先生、発起人の元田脩一先生、同じく発起人の荻野目博道先生、第2代会長・望月満子先生、第3代会長・山本昂先生、第4代会長・島村馨先生の方々のご苦労とご功績により、更には会員諸氏の英米文学の精神分析学的考察への弛み無いご努力により、今では海外にまで知られるようになった本学会が、今後益々発展し、社会に貢献出来るように会員一丸となって努力することをお二人の先生にお誓いいたします。

これまでの何十年間もの長きに亘る小城先生及び林先生との御親交に感謝し、謹んでご逝去を悼み、ご冥福をお祈り申し上げます。

『論叢』第45号（林曉雄先生 追悼号）に沢山の論文をご投稿いただき、感謝申し上げます。

投稿論文の査読については、編集委員 6 名（敬称略：飯田啓治朗、倉橋淑子、小園敏幸（編集長）、佐々木英哲、James Sumners、松山博樹）が全投稿論文に目を通すことを前提に、文学作品が内包する意味を理解すると共に、執筆者の意図を汲み取りつつ、膨大な時間をかけて、綿密な査読を行いました。そして、各編集委員から出されたコメントについては最大公約数的にこれを集約し、執筆者に提言したことを付記します。尚、第 45 号は副会長 2 名（湯谷和女、横田和憲）と常任理事の石田美佐江先生にも最終的な査読をお願いしました。

『論叢』第 45 号（林暁雄先生 追悼号）に掲載される学術論文は、最終的に 2 本です。何れの論文も、「人間の心理の広大な部分が無意識界であり、この広大無辺な無意識界から人間は絶大な支配を受けているが故に、人間のこの無意識界に、人生の多くの真実が存在する」という精神分析学の前提に立脚しつつ、解釈・批評の行われた独創的かつ読み応えのある学術論文です。

是非とも読者のご高見を承りたく、宜しくお願い申し上げます。

最後に、長年に亘り、本学会の機関誌『サイコアナリティカル英文学会論叢』の印刷・製本を快く引き受けてくださっている啓文社様に、また企画の段階からいろいろお世話になった同社の相良徹氏および有働牧子氏に、衷心より感謝を申し上げます。

2025（令和 7）年 2 月 20 日

サイコアナリティカル英文学論叢
——英語・英米文学の精神分析学的研究——（第45号）
林曉雄先生 追悼号

発行者 サイコアナリティカル英文学会
会長 小園 敏幸

印刷所 (株)啓文社 〒861-3102 熊本県上益城郡嘉島町下六嘉1765
TEL 096(368)8100 FAX 096(369)2677

発行所 サイコアナリティカル英文学会
〒752-0997 山口県下関市前田2丁目27-43
会長 小園 敏幸 TEL 090-8297-0729
E-mail: kozonotoshiyuki2@gmail.com
事務局長 有働 牧子 TEL 080-1733-1554
E-mail: udou@pu-kumamoto.ac.jp
ホームページ: psell.sakura.ne.jp

郵便局の青色の「払込取扱票」について
口座番号: 01500-9-28949
加入者名: サイコアナリティカル英文学会

2025（令和7）年3月20日発行

